〔資　料〕

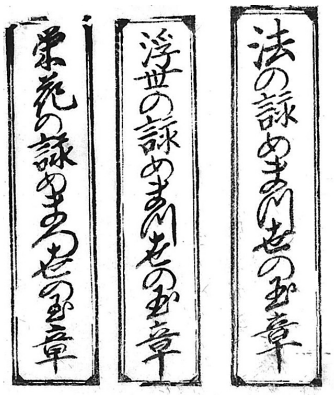
『准西國稲毛三十三所総縁記』翻刻と解題

関口　靜雄

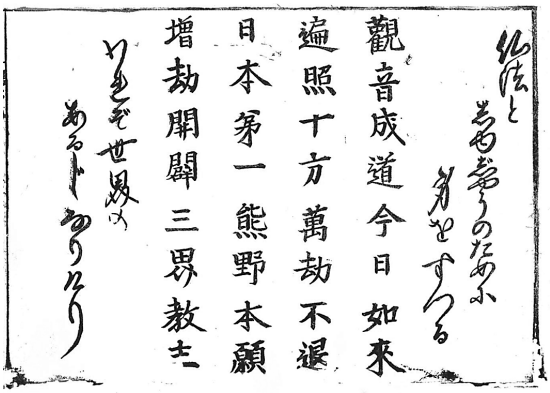
〔解　題〕

武蔵国橘樹郡稲毛領平村所在芥志山供養塔薬王庵主山田平七道本が宝暦十四年（一七六四）中夏に撰述した『准西國稲毛三十三所総縁記』を翻刻紹介する。道本は平村狢澤の名主で、通称平七、狢澤軒と号した。入寺入院の形跡は伝わらず、法名風の道本号は自ら称したものであろう。道本は神仏に対する信仰心きわめて篤く、宝暦十四年四月、西国観音霊場を橘樹郡稲毛領内に写した准西国稲毛三十三所観音霊場を独力で開創した。右『准西國稲毛三十三所総縁記』はそれを記念して自刊したもので、先年本誌（『学苑』八八九号「資料紹介特集号」平成二十六年十一月）に紹介した『准西國稲毛三十三所じゆんれいうた』とほぼ同時期の開版と思われる。

翻刻の底本には結願寺院泰平山東泉寺所蔵本を採った。霊場の午歳開帳に合わせ、昭和五十三年五月に東京都千代田区神田神保町所住の篤志家根本隆介氏が印施した復刻版であって、永代保存を配慮して本文全丁を厚手の楮紙に摺り、堅牢な装幀を施し書帙に納めている。なお『准西國稲毛三十三所総縁記』の題簽を貼付した表紙は新調と思われ、『准西國稲毛三十三所じゆんれいうた』の装幀から推して、おそらく上掲した復刻本の扉が宝暦十四年版の表紙だったと考えられる。



底本とした復刻版は扉題に示された、「法の詠めまつ舟の玉章」（四十三丁）「浮世の詠めまつ舟の玉章」（二十二丁）「栄花の詠めまつ舟の玉章」（六丁）の三章の後に、版芯の柱題に「増こう」とある四丁が付されている。「増こう」は増補の意味ではなくて、熊野権現の神徳の増劫をいうのであって、その第一丁目表の版面を示せば左のごとくである。

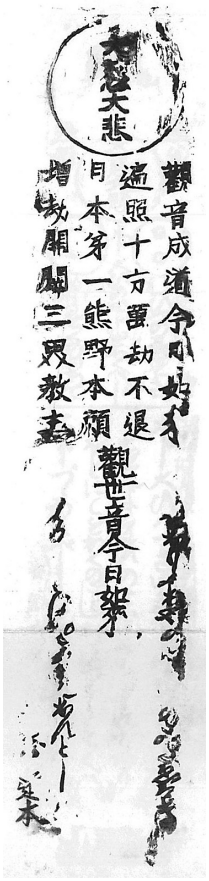


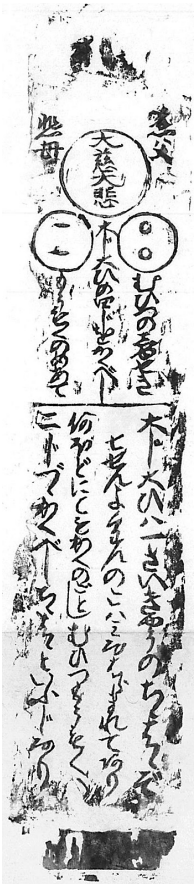
平村の熊野権現の神徳の増劫を讃えたこの四丁分の文章は、おそらく『准西國稲毛三十三所総縁記』とは別に版行されたものと思われるが、復刻版の制作を企図した根本隆介氏が当時薬王庵に所蔵されていた板木から新摺りして増補したものであろう。さらに復刻版には巻頭に二種類の文字札が綴じ込まれているが、これも熊野権現の神徳を讃したものである。なお巻尾に「法の詠めまつ舟の玉章」三十丁目の表裏に該当する一丁分が綴じ込まれている。川崎市中原図書館蔵の無刊記本を参考にしてしかるべき位置に移して翻刻した。これが巻尾にあるのは特段の意味はなく、製本時における単純な手違いによる乱丁と思われる。

『准西國稲毛三十三所総縁記』によれば、准西国稲毛三十三所観音霊場を開いた平村狢澤の山田平七道本は痰咳を患い、その十余年におよぶ苦しみから逃れ、「たとゑせなかにゆきしもぢきにふりはしのしたにやどるみとなるとも一たび無病になし給へ」と観音に念願し、宝暦四年（一七五四）八月十四日夜から観音称名を始めたところ、一年足らずで無病息災の身となった。平

七はそれの報恩感謝の意を示すために母親をともない西国三十三所巡礼をしたが、それは平村の熊野権現に、無事に帰郷できたなら三十三体の観音菩薩像を身命財を擲って建立するという誓願立ての旅立ちだった。しかし無事に帰郷したものの誓約を果たせぬまま忸怩たる思いで日々を過ごすうちに、ある日、かつて宝暦五年四月十九日夜の夢に、富士浅間から歌詠の題を授けられた吉夢を見たことを思い出し、欲心を捨て至心に富士を信仰したところ、神仏の像を新たに建立するよりは近在の寺院を巡礼したほうが利益もあつかろうと思い至り、熊野権現に祈請して西国観音霊場に准えた三十三の観音札所を稲毛領内に定め、みずから三十余首の御詠歌・和讃を作り、数度も納経の札を打った。宝暦十三年（一七六三）十二月には百日巡拝を行じ、ついに翌十四年四月、准西国稲毛三十三所観音霊場の開創を果たしたのだという。

平七道本は観音霊場開創の証明として芥志劫山薬王庵境内に西国観音霊場第一番那智山青岸渡寺の本尊如意輪観音に倣って如意輪観音を主尊とした「准西國稲毛三十三所供養塔」を建立した。おそらく霊場開創宣言の日に除幕されたものと推測されるが、道本はこれを図して「法の詠めまつ吉の玉章」の末尾に載せ、また単独に紙ふだとしても版行した。左掲するのがそれである。なお供養塔は薬王庵本堂前に現存する。





復刻版に綴じ込まれていた右の二種の紙ふだはともに熊野権現の神徳を讃したもので、本来は「増こふ」に付されるべきものである。道本の神仏に対する崇敬はまことに深く、神仏が衆生に垂示する大慈を父に大悲を母と観念するほどであって、それはながく患った痰咳を観音の霊験によって息災に導かれたと考えたことに起因し、准西国稲毛三十三所観音霊場の開創に及ぶのである。それについて山田平七家が江戸近郊の農家として比較的富裕な財力を有し、学殖も豊かであったことが窺い知られる。『准西國稲毛三十三所総縁記』に具体的な記述はないが、道本は土地や金銭の貸借をめぐって公訴されたことがあり、それが謂れのない誹謗中傷であったと憤懣を込めて記している。また農業技術の改良に進んで努力し、その成果を子々孫々に伝えたい思いが逆ってもいる。道本は和歌を教養や趣味としてではなく信仰心の表出と考えていたようで、その詠歌をさかんに本書に書き付けている。ついて翻刻にあたっては道本の表記を尊重し、復刻本の欠損は川崎市中原図書館蔵の無刊記本で補った。

データ入力等々に歴史文化学科二年生金藤あすか・三枝史果・佐藤結子・柳川亜美諸氏の助力を得た。また板木等平七の行業遺品を厳重に保管される東泉寺御住職上形卓道師からさまざま慈恩を施された。謝意奉る。

准西國稻毛
三十三所　總緣記

（白丁）」表表紙見返

」表表紙

准西國稻毛
三十三所　總緣記

法の詠めまつ吉の玉章

浮世の詠めまつ吉の玉章

栄花の詠めまつ吉の玉章

（白丁）」扉見返

」扉

准西國稲毛三十三所總縁記
法の詠めまつよの玉章序

如來のときたまわくむりやう百千万
おくのしゆじやうあつてもろ〳〵のくなふを
うけんに一しんにこのくわんぜおんぼさつ
のなをよばゝすミやかにかたちをげんじ
てそのくにかわりたすけんと云々賤痰咳
の病にくるしむこと十余年におよひす
でに身命あやうきにのぞミ観音ゑ
きせひし奉りたとゑせなかにゆきしも
ぢきにふりはしのしたにやどるみとなる
とも一たび無病の身となし給へとねん
願し宝暦四年戌の八月十四日の夜

【〇のり　一】

より万の欲德をおもひすて観音の
御名をしやうし奉り十余年一日もやす
からぬやまひついにいゑて無病の身と
なりぬ御報恩わすれまじきためさいこく
三十三しよへじゆんれいせんと念願して翌
年亥の七月廿四日母をいざなひさいこくへ
おもむきけるまづしきいとなみをすぐる身
なれハ孝養ハおもへどもこゝろにまかせず
せめて五障三じうのつミすこしもかろし
め奉らんとおもふもひんきんのあまりなり
たがひに身命をなげうつて大ひのみのりに
すがり乞食の身となつてさいこくたび
のことのはハ母とによらいのほかしるひと

」上01オ

」上01ウ

もなくくまのにさんろうし奉りなにとぞ
三十三しよをめぐりおさめ堅固にて本國へ
おくりとゝけ給ひなば三十三たいのくわんぜ
おんをしんめいざいをなげうつてもこんりう
し奉らんと御けいやく申奉りついに念願
じやうじゆしてたちかへり早速やくわう
あんに願書をさゝげ奉りじせつをまて
ども金銀のきたることもなく年月むな
しくすぐるしかるに宝暦八年寅の
三月秩父じゆんれいしみづくゞりのしも
さいこくどうにまいりくわんおんおはいし見
れば古ぶつ新ぶつふ同にしてあつめ
奉るくわんおんと見へたりいそぎたちかへ

【〇のり　二】

り新ぶつにこんりうせんより三十三
たいもらいあつめんとおもひ四五たいけい
やくし奉れどもぢきにもらいとらるゝほ
とけもなくたゞけいやくのミなり三十三たい
けいやくしてとりあつめんとおもへどもくふ
にしてこゝろにまかすることなくとしつき
うつりゆくまに露命のほどはかり
かたくもはや今生にてハじやうじゆしがた
しかさねてハふくじんになし給へむまれ
かわりてこんりうせんとごんげんへ御わび
申奉り比ハ宝暦十三癸未の三月薬
王庵にさゝげおきし願書そのまゝにすて
おかば後日のちじよくなりほとけハにくし

」上02オ

」上02ウ

とハおほしめさじとぐわんしよを申さげひらき
見れば三十三たいをこんりうし奉らんこと身
命財をかけなのした印判をすゑおきた
ること九年いぜんのことなれハさらにおぼへ
なしほとけものをいひたまわねばとて
このしやうもんいかでほごとなさるべきやこれ
をほごとなすならばしよてんのかごも今日
ぎりたちまちもとのやまいさいほつして
こんじやうのゑんつきんこれよりせい
くわんをたてなをしてしんめいさいをなげ
うたばたちまちにじやうじゆせんことを
よくしんのはなれなきゆへなり今日よ
りよくといふことをおもひきりふ

」上03オ

【○のり　三】

たゝびかへり見まじぞとおもへども三どく
のわかれなり尒るにあたる三月八日ハ父
十三ぐわいきのめいにちなりふたゝびはかを
ほってこつをひろいおひとなして今ひと
たびさいこくへのぼらんとつねゞ〳〵ねんぐわん
するといゑども四百四病にあしをとぢら
れとかくこゝろにまかすることなしこれによつて
そのこつをおい父十三くわいきついふくの
ためさいこくになぞらゑて近郷をじゆん
れいしはいし奉るべき三十三たいのくわん
ぜおんぼさつをみちびき給へと熊野
こんげんへ祈誓し奉りおよばずも三
十余首をもうけ三十三しよに奉納し

」上03ウ

しよにんのみちびきとももしならば三十三
たいしんぶつをこんりうしたるよりりやく
あつからんとおもひ納経札をうち数返
をめぐり同十二月八日よりあくる三月十八日
まで百日の日参じゆんれいし奉るときに
冨士淺間の印文らいかうの三ぞんハおいづり
両のかたにあつてにち〳〵しゆごし給ふこと
やうやくとおもひしりぬすぎつる宝
暦五年さいこくへくわだちのころ四月十九日
の夜のことなるにふじの中ぐうにて見
あぐれバたけのゆき見おろせハうみおもて
のふうけいをながめけるにふじせんげんより
歌の題をくだされしとおもへハゆめさめ

」上04オ

【○のり　四】

廿日のあさなりゆめハ一ふじといゑり吉
さうのごれいむなれハ金銀をもふくる
か又ハしよさくみのることふじさんのごとく
ならん今日よりぎやうに入てふじさんへ
さんけいせんとおもひ神主小泉出羽の父
白翁にかたり神酒をけんじてさんけいの
けいやくをいたし同七月朔日ふじさん
けいをとげさだめてきつさうのきたるらん
といよ〳〵しん〳〵おこたらす六年さんけいし
けれともついに金銀をもふくることもなく
まづしきおもひのやむことなくもつたいなく
もせんげんをうらミ奉り吉田前せんげん
にがくをおさめてゑかうしおわん神ハ神

」上04ウ

づうのごれいむなれどもぼんぶのあさ
ましくよくしんにくつたくしけるゆへしよぐわん
じやうじゆすることおそしよくしんをはな
れて見れハたちまちにじやうじゆする
ものをはなれなきがゆへにかへつてせんげん
をおうらみもふしにち〳〵じゆごし給ふこと
今こそハおもひしりぬ十年のあいだ心
かわりへんかわりやうやく三十三しよと
なるしよぐわんじやうじゆして見れハ熊堅
ごんげんハ此さとのちんじゆとなつていく百
年を満ちて三十三しよの先達をし
給ふかさいこくばんどうちゝぶそのほか
しよ〳〵に三十三しよのひろまること熊

」上05オ

【○のり　五】

堅ごんげんの御先達にあらずんハいかで
かじやうじゆすることをゑんやしかれは
准さいこく三十三しよを一しんにじゆんれいし
奉るにおいてハ利益いかでべつならんや
觀音經にいわくたとへいかなるふいきう
なんたりともねがふところにけんじて
そのなんにかわりたすけんとのごせいぐわん
なり又くまのごんげんのたまわくわが
まいに三十三どきたらんより一たび順
れいしたるともがらハたとへ十あく五ぎやく
のざいにんたりとも十しゆのとくをあた
ゑ六くわんおんのいんもん六こんにさづけ
給ふもしげんとうのりやくあらずんハ

」上05ウ

まつせにごんげんとハいわれまじと云〻
今ひろむるところのじゆんさいこくもし
仏教のことのはにそむけひと〳〵を
あくどうへみちびかばしずの身ハさ
きだつてぢごくのくるしみをうくべき
ものなりよつてあまねくくわんおんの
ちかひをめいじて後代に性名をく
たさん尓時宝暦十四甲申四月吉日
武州橘樹郡稲毛領平邑
狢澤軒山田平七道本敬白

天下泰平　國土安全

」上06オ

【○のり　六】

凡　例

○歌ハつきやはなをながめあるひハしき
のありさまあるひハしきよくうきよの
ありさまにこゝろをとゞめばおもしろき
ことのはもいやしきくちよりもまれにハ
いづべきなりされどもめん〳〵のなが
めわけてくわんおんのりやくをあげ
りをたすくることをおもとしはべるその
みそのまゝにりをすくいなをもと
むるゆへめづらしくおもしろきことのは
ハあらし哥どうをまなぶちしやのな
がめとハべつなり
○聲をもつてはべるところハよみをもつて

」上06ウ

理をしるべしこれハほうべんの道理
なり寺号山号をよミくだくときハ
むりにことばをつゞるゆへかゑつて理を
ころす其實其儘にはべり理をす
くひ句をたすくることをおもとしはべる
○三十三しよをつらね奉ることわたくしに
そなふるにあらず古仏れいぶつをゑらむ
にもあらずくまのごんけんへきせいをかけ
ゑんぶつをたづね奉るわがよくもなく
人のよくもなきやうによねんなき老女
童子にとひしぜんとしれ給ふをごん
げんのおしゑと決定してつらね奉る
三十三たいなり又あきらめがたきことハ

【○のり　七】

託籤をもつてくわんおんのおしへに
まかせはべる
○熊野権現へ祈誓し奉り西國を
こゝにうつし奉る
　さいこくにてるつきこゝにながむれば
　かゞみにうつすミくま堅のやま
○みづすミたるときハつきまとかにやどらせ
給ふ身ハすミたるみづのこゝろになりて
いながら西山のつきをなかむれハあわせ
かゞみとなつてうつらせ給ふことみづにやど
れるつきのごとしおのがこゝろのきよきかゞ
みにうつらせ給ふハ神のたいなりよつて
これをじゆんさいこくとなづけ奉る

」上07オ

」上07ウ

法の詠めまつよの玉章　上

観音ゑい哥　三十余首

第一番松本廣福寺

たのめなを廣きふくじゆの海なれば
　大ひの波のたゝぬ日もなし
ふくじゆのうみのはかりなきぐぜひの
寺なれば利益ひゞにいやまして
りやつこふふしぎの波のたゝぬ日もなしと
この哥ハ観音にそなふる古哥なるゆへ
おそらくハりやくしがたしたゞすこしそのこゝ
ろをさつしぬ余ハみなあらたに侍る

第二番五反田観音寺

もらさじとみちびきたまへくわんおんじ

【○のり　八】

　しるもしらぬもみてのはちすに
しるものもしらぬものも自他平等に
御手の糸にて道曳たまひて極楽浄土へ
おくらせ給ふとおもひていひける

第三番細山香林寺

たづねいるこゝろほそ山みちのべの
　草葉にやどるつゆの身なれハ
大慈大ひのたつときミのりにあひ奉らん
とまよひふかくおろかなる身ハくさばに
やどるつゆにおなじまもなくかわきて
あすもまたくさにおく露の命生
死のおもひをなしけるに大悲のうてな
にいたらんとたづねいるこゝろぼそきハ生

」上08オ

」上08ウ

死のみちのはかなきをおもひやりつゝ

第四番仙谷壽福寺

補陀落の美めうの法ハじゆふくじに
　いつもたゑせぬまつかぜのおと
補陀落ハくわんおんのみくになりわがくにハ
須弥のみなミにあたつて南閻浮州と
いふ佛界にてハなんぼうふだらくかいと
もいふや仙谷の甚深たる峯の杰風ハ
ふだんどくじゆのきやうほうとやおもわれ
けにたぐひなくこゝろことばにのべがたき
ていハみめうのミのりとやいわんうつくしく
たゑなることすがたことばのいふにいハ
れざるをみめうといふ也妙法のこゝろに似

」上09オ

【○　九】

たるべし妙法ハすゑにくわしく

第五番谷野口妙覚寺

たづねくるこゝろハすぐにめうかくじ
　ほかにほとけのみちハあらじな
山をこしたにをこし身をせつしてたづね
くるこゝろのほかにハほとけのちかひもなく
みちもなしとさとりて見れハわがこゝろハ
すぐにわれにそなふるところのほとけなり
佛性の實とならんところの妙覚の花
の露をあじわひてしるべし
ある人のいゑるにハ聲にて歌をはへるハ
俗語なりといふ人あり妙覚の二字をよ
みくだくときハことばをむりにつゝるゆへ

」上09ウ

理をよミころさん其實其儘にた
やすく幼童の耳にたもちうることを
おもとし智者のいゑることのはとハべつ
なり歌をもつて禅禄をさばき給ふ
祖師がたのれいもありよみをもつて
理をさとるか理をよミくずしてうし
なわんより妙覚と此内に理をふかくこめ
おくなり

第六番中野嶋觀音寺

ほつしやうのみやこにうかぶなかのしま
　やつのくどくのいけのみきわに
今まさにほつしやうしんによの極楽
浄土八功德池のみきわにうかび

」上10オ

【○のり　十】

しやうじたるれんげのうへにあそびた
のしむとおもひていひけるくわしくハ
三部経の中にあるべし

第七番宿河原常照寺

曇なきしんによのつきハ常照寺
　なをもはれよとおのがこゝろを
くもりなきしんによのつきハつねに
てらしたまへどもにごりくもるものハ
おのがこゝろなりはれけるうへにもなを
もはれよとおのがこゝろのあくをしりぞけ
て見ば晴天のつきならんとおもひて

第八番堰之龍嚴寺

慈悲ふかくのりのしがらミせきとめて

」上10ウ

はつせのみづのよどまぬもなし
濁世に生れおろかなるわれらあく
道へながれおつべきをかなじみ給ひて
ちかひをふかく法のしがらミをしてふせ
ぎとゝめ給ふくわんおんの弘誓なり
こゝろなきみづだにもしがらミすれハすこ
しハよどまぬみづもなしましていわんや
人としてこのみのりにこゝろをよどめ
ずといふことあるまじとおもひていひ侍る
しがらミといふてハいやしきことばなりと
いふひとありへ山川に風のかけたる
しがらミハながれもあへぬもみぢなりけり
と春道列樹の哥なり

」上11オ

【○のり　十一】

第九番長尾雪が坂

いつしかとかしらにつもるゆきがさか
たれかのがれんおひのとふげハ
佛のみのりをしらずふかくまよひう
き苔のことのはにばかりこゝろをよせ
いつの苔に都の花を見んとおもふこと
もなくたゞうか〳〵と光陰をおくりし
うちにいつしかとわがかしらハゆきのふり
つもれるがごとくとなるあさましいかな
草にやどる露とひとしき身なれば
ついにハかわきはつべきをしらずのぼり
つめてハかへられぬおひのとふげよわい
まだしきうちにこゝろがけべき道なりとお

」上11ウ

もひていひはべる

第十番押沼長谷寺

杰風や鹿のなくねも身にぞしる
いまはせでらのあきのゆふぐれ
無常の理をくわんずれハまつかぜも
身にしみ鹿のなくねも骨随に
てつしいまこそハあきハきぬとおもわず
もたもとをぬらすつゆの身のおしつけか
わきはつべきとおもひしりつゝ秋の夕
ぐれハものやう〳〵おもひていひける

第十一番長沢秋月院

たくさんに願ひもみつるあきのつき
あまねきかとにじひのかげかな

」上12オ

【○のり　十二】

つきハいつとてもてらし給ふものなれ
どもわけてあきのそらのすみわたり
たるときハ月もいとゞさやけく古人も
歌によミ詩につくりたまふ大じ大ひの
月かげハあまねくしすのいゑ〳〵まで
てらしたまふ慈悲のこゝろをはべる
大じ大ひのたいをさとりあきらめて見る
ときハ月といふも花といふもながむる
まなこのあてどなり釈迦といひ弥陀と
いひ神といひ佛といひ花といひ實といふ
もわがながめのまなこなり眼の醫瞙を
さりすてゝいま大じ大ひとさしてなが
むるところハわが身にあつてハ父母天地に

」上12ウ

あつてハ日月なり父母のじひに二重なく
日月のかげにへだてなしへ神と
いひ佛といふも明にものねをおして
見れハ日月ながめにこそよれある
智者のいゑるにハたくさんとハ平生いゑ
ることのはにて俗語なりといゑりおろか
なるしずの身のはべることなれハ尤なり
さりながらたくさんとハ山号なり幼童
愚痴のともがらまでもものゝみち〳〵た
ることをたくさんとはやくこの理をさとる
又此語も聲なりさわやまといふやうに
字を讀鈔しことばをつゝらばおそらく
ハ理をころさん

」上13オ

【○のり　十三】

第十二番有馬福王寺

めぐりきてこゝにありまのふくわうじ
　むりやうじゆゑいのちかひたのもし
浮世ハ三途の旅なりりんゑくわたく
のふるさとをいでゝ極楽のみちハいづく
ならんとたづねめぐりきて見れハさいわい
なるかなこゝにありまのふくわうじじゆゑい
ざんといゑハ弥陀の本願こゝにこそと
おもひてむりやうじゆゑいのちかひたの
もしといひけり

第十三番山田觀音寺

きみがため山田のさわになをながす
　じひのころもハいまだかわかず

」上13ウ

末世のじゆじやうをかなじミ給ひていか
なる山さわにもいり火にもいり水にも
いり三十三身にふんじしゆじやうのうれ
いにかわらせ給ふその御泪いまだかわかず
とおもひていひける君がためとハ末世を
かなじみ給ふところのうへなきことばなり
君がため春の墅に出てわかなつむと
光孝天王天子の御身としておふせられし
こと葉なり山田のさわとハ其儘にて人
ハいかゞとやいわんみやこよりいなかをさし
ていふ古哥にも見へたりべきみがため
山田のさわにゑぐつむと古今集に
も見へたり

」上14オ

【○のり　十四】

第十四番久末蓮花寺

御手をのべすくふ大悲ハひさすへの
　よろず吞までもたのもしきかな
墅のすへ山のおくまでもゆくすへかぎり
もなきおんちかひなればひさすへの千代
萬代までもたのもしきことなりとおも
いていひけるみてをのべとハしぜんにおもひ
つきしことばなり尓るに扉をひらいて
靈像をはいし見れば左にれんげを
もちたまひ右の御手をさしのべさせ給ふ
唐容の尊像なり

第十五番子母口大野原

さしもぐさしめじがはらのみなしごや

」上14ウ

悲母のごぐわんをうるぞうれしき
六道に輪田し二佛のゑんにとをきいま
末代のしゆじやうハ大野はらにすてら
れたるあさましき身なしごとやいわん
しかるに悲母によらいの御誓願にて
らされ大ひのれんだいにすくひとらるゝと
おもひさだめすぎつる七月十六日はじめ
てこの地にいたり子母の二字をいふべき
ためかくいひはべるその後八月十六日に納
経せしおりから蓮乗院法印この観
音の立給ふところハさほさきの空地に
て郷中もちのぐわんおんなりとの御物
がたりなり左あればくまのごんげんの

」上15オ

【○のり　十五】

ごせんだつにて有縁の土地にゑひ
哥もほとけにそなわりあるといふ
證固にたち給ふくわんおんなりよつて
このところに一札の起請をかきてお
さめおきぬしめじがはらといふハ三かい
のうちにおいてハ六道中有の空地をさし
てしめじがはらといふ尓るに一郷のうちに
おいてもなわのいらざるところなれば
これしめじがはらなりくふちにたち
給ふといふことを賤につげたるひともし
あらばほとけのまいに妄語をかきおく
このつミによつてながく地獄のくるしみを
うくべきものなりしかれハしよにんこの

」上15ウ

ところにあゆミをはこびうたがひの念
をはらし罪障懺悔して大ひの稱
名をねんじれいけんにあずからすと
いふことなしいわんや末代はくちの
ぼんぶ七なん八苦の愁くわんおんいじん
のちからにあらずんばなとかたやすくまぬ
がるべけんやわけて大なんくかいのせきに
のぞまばたちまちにあくねんをひる
がへしれいすいにとび入六根のあかを
きよめ南無大じ大ひくわんぜおんぼさつ
と一しんにしやうめうし三十三どらいはいく
ぎやうし奉らばたとへ定ごふひつしにさだ
まるいのちも三十三しよをめぐりうる

」上16オ

【○のり　十六】

まてハじゆめうのびすといふことあらじ
岩川やこけむすみづに身をこらし
こゝろをきよくくみてしるべし
われもたつとき佛性なれども三毒に
くるしめ奉り自身如來につひにま見
ゑずして一生をさる苔の中のていたら
く露のミのさとりあらばぢきにほと
けによらいとひとしき身とならんとおも
わばしんゞ〳〵に身をこらしこけのしみ
づにこゝろをきよめながれをくみてよ
くよくあじわいて見ざれハわが仏性
のみなもとありどころハさとりしめま

」上16ウ

第十六番岩川長命寺

じきぞとふかきこゝろをいひける

第十七番神地泉澤寺

つくりなすつミをバなにとせんたくじ
　こゝろのみづにあらいきよめよ
無始よりこのかたつくりなすつミ
とがハいかゞせんとおもひけるにさいわい
なるかなこのてらの御ちかひしんによ
のみづにくたしてこゝろのあかをあらい
きよめよ無りやうのざいしやうたちま
ちにきへながれてせいけつの身とな
らんとおもひていひはべる

第十八番小杖西明寺

紫のくもたなびきてさいめうじ

【○のり　十七】

ひゞ〳〵にいる日を見るにつけても
日月の兩曜だにも紫雲たなびき
てひゞに西へにしへといり給ふまして
いわんやぼんぶのわれらハさいほうを
ねがふべきはづなりとおもひてひゞに
いる日を見るにつけてもといひてくわん
おんへうたを献じてたちいでけるすで
にその日もくれがたいる日を見ておもひ
つきぬくわんおんへさんけいせんとおもひて
宵よりこゝろにかけねむるまもなく
おぼへけるに夢のこゝろにしうんたなひき
て日輪にし山の葉にかゞやきたまへハは
や今日ハくわんおんへもまいられまじと

」上17オ

」上17ウ

おもふまにいりあいのかねかとおもへば
ゆめさめて見れば夜あけのかねなり
すぐにおきあがりかんがへけるにあさ日を
ゆめに見ばめでたかるべきにいり日をゆめ
に見ることハわがぐわんじやうじゆせずにいのち
おわるかとおもへハしよくじもむねにおちかね
こゝろおくれて同行にいざなわれ入日に
むかつてゆきけるにて夢のことをおもひ
つきぬさてハよあけのゆめハこのくわん
おんのこれいむならん西明寺をいわん
ためにむらさきのくもといひはへる西明
寺をにしにあきらかといふて見れハ
めん〳〵の身のうへをおもひしるべきた

【○のり　十八】

めひゞにいる日を見るにつけてもといひ
ける上の句ハなにごゝろなくおもひつきて
ひさすへれんげじに書ておさめおきける
におもひがけなきくわんおんにあい奉り
さいめうじにて下の句おもひつきし哥と
ゆめとのわりふのあいたるハまさしくくわん
おんのこれいむ西明寺の院家しずがし
ぐわんをしつて是非に三十三しよの内に入れ
奉らんと観音へいのられし一念のつふ
つるところかとみちすがら同行十一人かた
りながらかへりぬ

第十九番北見方正福寺

ふるさとをはる〳〵こゝにきたミがた

」上18オ

」上18ウ

いそげやにしにありあけのつき
あるひハ三悪趣六道りんゑのふるさ
とをやうやくとはなれ今佛法繁昌
のこのどに生れきたれどもあさまし
いかなわれをはじめ悪道よりはじ
めてむまれきたれハふるさとのくせ
うせかねてなんぞのはしにハおのがふる
さとふるさとのことのはをあらわしあさ
ましきていたらくを見するひと〻〳〵のあ
りさま狐ハ尾をかくし馬ハいなきを
つゝしんて愚痴をふるさとのはぢとしる
へし曇なきまなこをもつてあまね
くせかいを見れハ人〻のふるさとハおそ

」上19オ

【〇のり　十九】

ろしくめのまへにあらわるゝはづかしき
ものハわがふるさとわれしらすおもひの
ほにいでゝ人目にハ見ゆる左ハいひなが
つゝしミなきハわれをはじめあさましき
まよひの身なりしかればほとけの
てらし給ふまだありあけのつきの
あるうちにいそぐべきみちなりとおもひ
ていひけるふるさとのことのはにつけて
又いひける〳〵つゝめどもかくれぬもの
ハふるさとのほに出てあきのおのがたね
かな〳〵はづかしきものハまきおくおの
がたねみのらぬあわのなにてしるべし
犬粟とハみのらぬものをこそなづけ

」上19ウ

たりおもひのほにいでゝ畜生かいより
はじめてこの土にむまれきたる人間
ハ因縁こそよくして人界へしやうじきたれ
ども古郷ちくしやうかいのくせにわかにハう
せかねいやしき身とむまれけんどんぐち
にしてちゑなく財寶ハくらにつむとも
礼学射御書数の六藝ハそなへがた
しこれふるさとのたねとんじんちの三つの
くせハせひもなしみのるもみのらざるももと
のたねによる悪をしりぞけよりすてゝ
よきたねをとりゑざれハ宿植德本
衆人愛敬あるよき吉つぎの子をハ
もうけまじきぞと仏性をちかく

」上20オ

【〇のり　二十】

さとり此埋をもつておふむねをしる
べししかれハ五たいを具足するといふ
ことおろかなるいんゑんにてハあるましきい
く生がいのたねをとりゑらんて此身と
ハなりぬるかとおもへハもつたいなきことなり

第二十番諏訪河原明王院

さほさしてはやのりはなせすわがわら
　いまぞほどよきのりのおひかせ
今佛法繁昌のおりこそよけれ
はやくしやうじのきしをはなれて
ふしやうふめつのみだのみくににおふ
じやうすべしとハ浄土教に見へたり
あくをすてゝ善にちかよるハこれ

」上20ウ

のりのおひかぜと理をちかくさとり
しるべし

第二十一番川邊狼周院

川邊のきしにのぞみてごくらくへ
いまのりゑずハいつかわたらん
われらしゆじやうハかわのべのきしにのぞ
みしものなれば觀音ハじひのれんだい
をかたむけ聖衆來迎ましく〳〵てい
ざないたまふをさいわいこのときに穢土
をはなれ浄土のうてなにわたらずん
ばいつか生死の岸をはなれんと浄土教
のこゝろをりやくせり佛法流布の御代
なれば教の門に入て悪をとをざかつて

【○のり　二十一】

善根にちかよるべしと理をちかくさ
とるべし

第二十二番久本大蓮寺

いまハはやこゝろあんざの大れんじ
うゑなきのりの身こそたのもし
佛教の門に入て悪をはなれて見れハ
こゝろもおちつき三千界にあまねき
大蓮花のうへにのりあんざしたる
こゝろなり自他平等に一れんたく
しやうといふ義理なりしかればたのもし
き身なりとおもひて

第二十三番末長増福寺

もらさじとふくじゆのうみのはかりなく

」上21オ

」上21ウ

まだすへながきちかひなりけり
福聚海無量とはかりつもられざる
ところの御誓願なれハたゝ平等に
泄さじとちかひ給ふまだいつまでと
かぎりなくすゑながくかなじみ給ふこゝ
ろをいひけるまだといふことの葉にハ
はかりなき如來のこせいぐわんをこ
めおきぬ

第二十四番新作狼福寺

極楽とおもひさためてたのむべし
花もあらたにさくとおもわは
今ハはやたのもしき身となりこれにす
ぎたるごくらくハなしとあんじんけつ

【○のり　二十二】

じやうしてたのむべし行者一人浄土
にしやうずるとき壱本のれんげあ
らたにしやうずるといゑりところの名
さへ新作といゑばわかあんざすべき
ところのれんげあらたにさきたるとおも
い今こそハ極楽浄土なりとおもひさ
だめていひける

第二十五番馬絹千手堂

ありがたやせんじゆのいともつゝみきて
じひのみもとにいまハきぬらん
三界六道一切衆生あまねくすくわん
がためにほうべんをめぐらしみちびき
給ふ数千のいともたぐりつゞみて

」上22オ

」上22ウ

みてのれんだいにいまこそハいたりぬと二
ねんなくぞおもひていひ侍る

第二十六番同所小墓坂

はちすばのみのりにのぼるこだいさか
　ながきすミかのみねさかもなし
其門に入て仏法修行をはげミ身を
こらしこゝろをくだきぶつしやうをたづね
て見れハはちばのうゑのすミかなり
たゞわがぶつしやうのたまをたつねんと
おもふうちがこだいさか上ればみね
さかもなきなかきすミかなり理ハ現
前にちかくさとるべし

第二十七番作延延命寺

【○のり　二十三】

一しんに大じ大ひとねんずれば
　みのりのはなハいろもさくのぶ
この寺にゆきほとけいかなる形像
にましますやはいし奉らんといひけれ
ハ一しんにねんすればおなしこと
なりとおふせられしゆへかくいひける尤
なるかな仏體ハあるにもあらずなき
にもあらずたゝひとのしんずるところに
利益をあらわし給ふしかれハ一しんに
ねんずれハわが仏性のはなひらかぬ
ときもなしみのりのはなとハわがむねの
れんげなり如來これを法花との給ふ

第二十八番長尾神木堂

」上23オ

しんぼくのまつも後仏のほんくわいを
　けふそよろこぶあかつきのそら
昔神代より仏法のひろまるをまち
てこのくにゝしんとくをあらわし居給ふ
漸とぶつほうひろまりしやくそんにう
めつまし〳〵て後仏今に見へたまわす
二仏のあとやさきとをくむまれしワれ
らなれハいかゝせんとおもひみちすがらひ
とりいにしへをぎんじけるに東天はる
かにあかつきの明星あらわれさせ給ふ
をつく〴〵と見れハそらもすみわたり
げにたぐひなくかんじ見れハいまこそハ
みろくしゆつせのあかつきなりとおもひ

【○のり　二十四】

ていひける

第二十九番長尾千手堂

たゞたのめちゝに利益のいろまして
　せんじゆのひかりあらたなりけり
かず〳〵のみてをのべさせ給へハたのミ
をかくるたびごとにりやくいやまし
たのむほどなをりしやうあらたなるみ仏
の御ちかひなるゆへかくいゑり

第三十番平之舊寺

ちかひおくほとけのあとハふるでらに
　のこるけむりハいまもかふばし
いにしへの仏場なれハ蘭やはちすのかふ
ばしきたねのこりたつときほとけの

」上23ウ

」上24オ

」上24ウ

れいけんをあらわしたまふゆへかくいひける
本尊十一面観音ハ傳教大師わが朝に
なむあミだ仏の六字をおしゑひろめんとお
ぼしめすといゑどもいまだなむといふこと
をきゝたることなきしゆじやうゆへさま〴〵に
おしへ給へどもきゝおぼゆるものなしこれに
よつてすぐにしよくしゆぎやうの身とな
りてしゆじやうさいどせんことをおぼしめして
わらぐつをはきみぎの御手にしゆじやうを
つきひたりの御手にハあまねくしゆ生
をすくひのせ給ふところのれんだいをさゝ
ぎせきじやうにたゝせ給ひてみづから
おんすがたをこらんじてつくらせ給ふハ

【○のり　二十五】

十一面くわんおんなり衆生済度のごせ
いぐわんはじめてつくらせ給ふ無二のれ
いぞうなり乱世のときゑいざんをくだら
せ給ひ東地にうつらせ給ふ委ハ傳記
別にあり賤なかたひ三十三たいをもらい
あつめんとおもひしとき才一番にけいやく
せしほとけなれども三十三處につらね
奉るゆへ札順三十番に定めけるよつて
手引のくわんおんとなづけ奉る後につち
はしふるでらに札をうつ[illegible]竪川西藏
寺も同じたとへハ仏の法にハそむけても衆
生のこゝろにそむくときハ大願じやうじゆ
のさまたけとなるゆへ畢竟方便の道

」上25オ

」上25ウ

りなりよつていづれに札をうつもおなじ
こゝろなり

第三十一番平之観音寺平等院

なにごともいまハたいらになりにけり
　自他平等といのる身なれば
何事もみなおもひすてへだてなく
じたびやうどうといのりくわんおんのみて
にのりて一れんだいうゑにたのしむ身
なれば今ハたいらにこゝろもおちつき
しとおもひていひけり

第三十二番芥志山供養塔薬王庵

苔をてらす大ひのかげもあり〴〵と
　とうぼうるりのひかりさしそふ

【○のり　二十六】

くわんおんといひやくしといひ今日てらし
給ふところハ大じ大ひのかげなりねんず
るところにひかりをさしそへ給ふゆへかく
いひけり此ところハしずが地にして薬師
のいほりなり三十三たいのくわんおんをたづ
ね奉るいま一そんにしてくわんおんにあひ
奉らずこれによつて熊竪ごんげんの宝
ぜんにおいて上と下とに二本のみくじを
おろし見れハ上にましますとのおしへに
まかせこゝろあたりのところをたづねけ
るにあひ奉らずよつてごんげんをおうら
ミもうし又くさをちぎつて三本のくじ
をこしらへてとりけれハかミにてもなく

」上26オ

」上26ウ

しもにてもなくまぢかきところにまし
ますとのみくじなりしかれハ三十三しよを
じやうじゆせばくよふをなさんとおもふもし
くよふぶつにてましますかとおもひてかへ
り母にかたりいたるところに今はセの
宜長和尚きたられこのよしをきゝ給ひ
わがかたにれひぶつ一尊ましますくよふ
ぶつまだできさせたまわぬものなれハおく
本尊になし給へとありけれハおもひの
ほかあしもとにてくわんおんにあひ奉る
これくまのごんげんのおんさづけとおもひす
ぐにその形像をはいし奉りいそぎくよふ
本尊となし發願わが地にそなへ奉る

【○のり　二十七】

ゆへ先達くわんぜおんとなづけ三十二番
の札をおさめけるくよふ塔本ぞんハ西國
一番熊野那ちさんに准て如意輪
観音のぞうなりわけてしゆじやうゑんを
あつくなぞらへて六十六くにを修行して
手の内ほうしやをあつめとぼしくけ
しをつむがごとくこんりうしたるゆへ芥志
山ともいふ地輪より六字のしやうめうを
もつてつミあげくよふハ四月十五日貴
賤老若ねんぶつ行道三べんづゝくわんおん
をめぐりあまねく数万の人のこゝろをう
つすことをてんげんとしもらさず行道し
おわつてゑほう同おんの念仏ハ西方極

」上27オ

」上27ウ

楽國のゑひぐわになぞらへ大ねんぶつの
おんじやうハ天につうじふるあめをとむる
ことまことに天にふたをするがごとし数万
のきせんくんじうするといゑどもこと〴〵
くみなぼたいしんをおこしたれか一にん
いらゝかにものいふ人なししかれハじゆん
れいするともがらハこのところにめぐり
きて三十三しよの惣ゑかうおもふほとけ
のゑかうをなすべし毎年四月十五日ハ成
道會となづけてあつまつて念仏行
道有縁無縁のゑかうをなしてこと〴〵
くばんれいもうじやのよろこびをきくべし
後に堅川さいぞうじに札をうつこと信

【○のり　二十八】

じんのもだしがたく賤がこゝろをわけて
ひつきやう方便のために東方西方とな
づけ札を納めぬいづれにふたをうつ
もおなしこゝろなり

第三十三番平之東泉寺補陀落院

ふだらくのたからのふねもつきにけり
　ねがひもみちてのりのみなとに
三十三たいをはいしたてまつらんとおもふ
ねがひもじやうじゆして見れハ百千
万のたからをふねにつミ本國わがみ
なとにふねのつきたるこゝろなりこれ
にすぎたるたのもしきことハなしと
大願成就のことのはをのべり

」上28オ

」上28ウ

芥志劫供養くとくのことのは

大日本ワがてうハ
しるしハ六十六かこく
あまつこくどをわけ給ふ
いなけ三十三がしよも
ほうべんりきにあらずんハ
しかれハばんれいくよふとう
一りう二りうをつミあげて
芥志一りうをしゆみせんと
いだけとかねをつむとても
とんぢんちの三どくの
つまざるものにおとるなり
よねつぶ一りうほどこさバ
大ひのくにゝさだまれる
もとハ三十三くにに
これも大ひのきずいなり
くまのさったのきすいなり
などかじやうじゆすべけんや
ありのとうをつむごとく
三十三しよのくよふとう
とぼしきざいをつミあぐる
おしミのざいハせんもなし
むねのほのふにこげうせバ
たゞ一りうのしやうめうぞ
二せあんらくとくよふせよ

」上29オ

【○のり　二十九】

あわつぶ一りうほどこさハ
けしつぶ一りうほどこさハ
けし一りうハかろからず
たんせいむ二のしやうめうぞ
やう〳〵とつミあげば
あまのおどめがまいきたり
なでゝなできるときまても
あらんかぎりハちかひおく
ゑんなきしゆじやうハどしがたし
もらさずすくひとらずんハ
ふかくちかひをたて給へハ
くだくこゝろハたがためぞ
わがでにしぼるつゆのそで
せんぞうくよふとゑかうせよ
けしこふくよふとつミあげよ
につぼんごくにもかへがたき
一りうづゝひろいとり
こりかたまりてはんじやくこう
三ねんに一べんつゝ
大ひのかげのよをてらす
くちせぬいしのくよふとう
山おくたにのそこまでも
くわんおんほとけになるまじと
じひせいぐわんに身をこらし
きみがためとてわかなつむ
とてもおしまぬみなりせば

」上29ウ

こかねのはやしをすぐるとも
一りうなりとこゝろよく
身をまつだいのまろかせと
まずしきおもひをしらずんハ
もとのむかしにたちかへらん
ひとたびむなしからざらん
切にかおしミのあるべきぞ
おしミのものをもらいとり
ゑんしやうぐらにことならす
くずるゝことをおそるなり
ひにくをそひてちをたらし
一りうこそハけしくよふ
ひんしやのあわよりやすきゆへ
おしミのものハなにかせん
おしまずまくハわがたねぞ
もたぬむかしをわすれつゝ
いまハてうじやとくらせども
かりのやどりのかりのミハ
身のゆくすへをおもひなハ
いかつにほうをすゝめつゝ
どうとふくよふをするとても
じせつとうらいそのときに
たゞねかわくハひんせんの
とぼしくゑたるしやうめうの
こめハかういのしよくじにて
二せあんらくとたとへたり

」上30オ

【○のり　三十】

あわハげにんのしよくじにて
ひんかのとぼしきざいなれハ
けしつぶ一りうほどこさば
ごくひんにんのまことなり
ほとこすこゝろときこへても
ひとのこゝろハけしにても
みちんもつもれハやまとなる
一りう万ばいときくからハ
よねつぶ一りうたねにまき
もみのつぶハかぞふれとも
一ほんのけしとなる
なにほどぞといふことを
じひぜんごんのまくたねも
あじわいうすくこつぶなり
せんぞうくよふとたとへたり
けしこふくよふとたとへしハ
あらばありぎりなにほども
なきハかなしきごくひんの
くどくハしゆミのたかさなり
せんごんくどくのまくたねも
たからのたねもそのごとく
一ほんのいなぼとなる
けし一りうをたねにまき
ひとふさのけしのたね
かぞへつくすひとあらじ
このりをもつてさとるべし

」上30ウ

けしのあんにんほどなりと
くどくかうだいなることハ
けし一りうハかろからず
いかなるけしそといふときに
三十三しよをしやうじゆして
まだほどとをきちかひなり
ほうといふもなくなりて
五十六おくすぎゆいて
じゆめうめでたふまつたふし
ねんなきこともあるまじき
あしたをしらぬひと〳〵の
ワがみぶつどをさりす□ハ
ほとけのゑんにあいはぐれ

まことをくよふするならハ
しゆミせんよりもまだたかし
につほんごくにかへがたきハ
またもふたゝびこのさとに
けしこふくよふのあるまでハ
ほとけといふもなくなりて
くよふのいしもくちはてゝ
七せんまんざいそのゝちまで
またのくよふにおふひとハ
さもなきろうしやうふじやうなる
またとふたゝびあいかたき
ふたつぶとなきけしくよふ
むなしくさんづにかへるなら

」上又30オ

【〇のり　三十】

わうじやうこくしといふことも
かい大くわんぎのかねのねを
せまきくにゝむまれなし
せんぞをうらミよしゝそん〳〵
りハげんぜんにおもひしれ
けしこふくよふのふくのたね
けしこふさんのいたゞきより
おのかでんちにしやうずるぞ
しぜん天のめぐミあり
まくぜんごんのたねうすく
これ又いんぐわのどうりなり
しよせんのくるゆきもなし
苛のあたことにいふごとく

なきしまぐにか山のおく
きくことならぬおんこくの
たからつたなきかなしミハ
まかざるたねとそのときに
わがめのまいのかゞみなり
ひとたびはへずといふことなし
そのたねこくとにまくときハ
いまごくひんのみなりとも
いま又うとくにくらすとも
ひんしやのおもひをしらずんば
そのときぢつほもたざれハ
つもるたからもそのごとし
てんかハまわりもちといふ

」上又30ウ

しずかめがねのくらくんば
しかれハけしこふ大くよふ
たゝせ給ふくるわのうち
山おくたにのそこまても
くよふしたるそのひとハ
しまわうこんのミとなると
もちきたつてくよふする
三どくまよいのしゆじやうなり
墅のすへ山のおくまでも
しゆじやうのゑんをもとむるも
六はらミつのせいぐわんなり
てのうちくよふいゑ〳〵に
ひとにくれるとこゝろへな

苛をハかゞみと見らるべし
三十三しよのくわんぜおん
につほんごくとかくごして
一りうなりともちきたり
けんざいにてほとけとなり
あまねくせかいへふれるとも
ひとハおふくハあるまじき
しかれハミづからをもてゝ
あゆミをはこびいゑ〳〵に
じひをこくどにめくらさん
すべてしゆぎやうのにんひにて
とりにきたるとこゝろへな
おのがてんぢにたねまきて

」上31オ

【〇のり　三十一】

みのりてのちハたれかとる
壱斗まくたの五升ほど
きやうじやハでんぢまくハたね
まなこをねむつてくわんねんし
さいほう二せのくとくなり
けしもつもれハ山となる
おもきちかひのたまづさを
つゆのいのちやきへゆかん
如意輪観世音
總長一丈一尺　天下太平国土安全
竿四尺一尺七寸　準西國稻毛三十三所供養
四面圖三面見　五穀成就万民快樂

山劫志芥

たゝねんごろにたねまけよ
みだつハそまつとしられたり
大じ大ひのしやうめうを
いとたいせつにまくべきぞ
だんばらみつのしゆきやうなり
こりかたまれハいしとなる
くちせぬいしにきりつけて

まよひぬる人のためとやありあけのたのまぬつきの夜〻のともし火
かれはてんのちのかたミになつくさのふるきちかひをしるしおきつゝ

」上31ウ

○くよふのうたちかひのことのは

〻まよひぬるひとのためとやありあけの
　たのまぬつきの夜〳〵のともし火

つきハさやかにてらせども　まよふしゆじやうのミのうへハ
あんやにすむがごとくなり　みちをたがへ理をたがふ
まよゑるひとのためにとて　たのまぬつきのてらさせる
ものとおふむねりハしれど　たのまぬつきはいたづらに
大し大ひのくわんおんを　しつかりとてにとらへ
そのねをおして見るときハ　今月さまのほかになし
天ちひらけてこのかたハ　たゞ一日もけだいなく
ひがしよりでゝにしにいり　やくそくたがへずいで給ふ
しやうもんしたることのはも　たがふハひとのこゝろなり

」上32オ

【○のり　三十二】

一天四かいのそのうちハ　はりでつくせきほどなりと
よけもべたてもなきじひの　おこゝろおもひやるために
たのまぬつきといたづらに　いわハぼんぶこゝろなら
などかてらし給ふべき　てらすはづにてらさせる
ものとおぼゆるひとおふし　ひがしよりでゝにしにいり
いらせ給ふへハよるとなる　くらきやミぢをかゝぐらん
まよふしゆじやうのためにとて　たれかたのまんつきいでゝ
そらよりくわうめうひをとぼし　せじやうにあかりを見せ給ふ
大じ大ひのおんこゝろ　おもひやるべきそのために
たのまぬつきと申すなり　たのまぬひともなけれども
かぎつてたのむひともなし　かなぶつもくぶつせきぶつに
こしらへてたておくハ　ぼんぶのまなこのあてどなり
またハまとゝも申なり　たのまぬことにほねをおる

」上32ウ

けふのぼんぶハよもあらじ　大じ大ひといふぎりを
てらさんためにかくいゑり

○ちかひのうたかたみのことのは

〻かれはてんのちのかたミになつくさの
　ふかきちかひをしるしおきつゝ

めん〳〵ひとのミのうへハ　なつくさにことならず
がんおうびぢよくのよそおいハ　たれにおとらぬミなれども
いやしきミとハむまれきて　みハむさしのゝなつくさや
こくさこしばとひとかまに　かれハまくさとなりはつる
しげれるうちハわすかにて　あきしもがるゝそのゝちハ
すぎつるにわのなつくさハ　なにをたよりにたづぬべき
じねんぢよよの山のいも　つるのしげれるなつのうち
しるしをさしておくならば　ふゆもほらるゝものぞかし

」上33オ

【○のり　三十三】

かれはてゝのそのゝちハ　いづくをたつねほりうべき
まつそのごとくしずのミハ　なつのこくさにさもにたり
しげりさかふハわずかにて　おしつけかるゝそのゝちハ
なにをかたミにおくるべし　きん〳〵ざいほうたくわへて
まごやひこらにゆづるとも　まつせのたからになりもせず
のちのかたミにおくものハ　大じ大ひのちかひより
ほかにたからの山もなし　おそれおふきことながら
ゑかうにそなふ二しゆのうた　くよふとうのりやうわきに
きりつけしすが兩がんの　たまとおもふてちかひおく
まつせにおくるかたミなり　こひねがわくハしずくさの
かれてあとなきすへのよに　三十三しよをうちおさめ
このところにめぐりきて　こゝろあるへきひと〳〵ハ
ばんれいくよふともろともに　なみだのつゆのたむけミづ

」上33ウ

なむあミだぶつの一へんに　しんめいさいをとりかへて
あめかしたにすておわん

○しゆぎやうのこゝろへさとりのことの葉

ぶつどうさとりといふことハ　おくぎのふかくむつかしき
ものとおもへるひとおふし　べつのしさいのなにあらん
もつともさとりたるひとハ　そのしん〻〳〵のとくにより
ひとのこゝろをよくしれり　ぢつなきひとにかぎつてハ
いよ〳〵しれるものとなり　されどもむかふへくるひとハ
なにやかあつてなにをもち　きたるなどゝいふことを
こと〻〳〵くしるものと　せぞくのひとのことばなり
あやまりのはなはだなり　きたるひとのこゝろをしり
うつわのうちのものをしり　かげなるものを見とをすハ
つうりきといふなるべし　さとりのうへのじんりきなり

」上34オ

【○のり　三十四】

ときにのぞんでたま〳〵ハ　つうりきじざいをうることあり
せいぐわんりきのとくによる　三めう六つうつね〻〳〵に
ぐそくするといふことハ　ほとけのゝちハおふくなし
さとりとめうとつうりきハ　べつなるものとこゝろへよ
ほとけのさとりもふ同なり　つら〳〵ふつどうしゆぎやうして
よくしんのあかをすて　しん〻〳〵のとくをゑて
ほとけのりやくにあづからハ　たつときミのりのあじわいを
こつずいにくいおぼへ　ぶつどうじやうじゆするほかに
おくぎのふかきことあらじ　ぶつどうしゆぎやうといふことに
こゝろかたぶくときまでが　おもき三とくまよいのミ
よつてさとるひとハなし　いにしへのそしがたも
おふせおかれしことならん　ぶつどうさばきをしそこない
はなはだこゝゑたかへある　そのミちしるべきひとにあり

」上34ウ

ぐちのしゆじやうハこと〻〳〵く　さとしがたきものゆへに
ほんぐわんによらいの一行ありぎやう　さとりといふじのるいを見て
しだいふどうをさとるべし　ぶつどうしゆぎやうのさとりのじ
悟故十ほうくふならんこ　ワがこゝろのそのほかに
とりとゝむべきものもなし　しかるにさとりといふものゝ
すがたをたとへてにとつて　おしあきらめて見るときハ
しらきくてまりのごとくなり　ほとけのたづさへもち給ふ
によいほうじゆのごとくなり　しゆにんこれをたつとんで
めんかうふはいのたまといふ　めんかうふはいにあらずんハ
さとりのすがたにあるべからす　これをたとへてしやかによらい
めうほうれんげとの給ふか　みなわがこゝろのすかたなり
しからばさのミのことあらじ
へさとるなよさとりて見れハ吾ハすたる

」上35オ

【○のり　三十五】

よくあかほんなふおしむみならば

○佛とぼんぶしやべつのことのは

さとれハほとけなりといふ　ほとけといふハなにものぞ
ぼんぶといふハなにものぞ　ほとけにもぼんぶあり
ぼんぶにもほとけあり　ほとけもまよへハぼんぶなり
ぼんぶもしんのとくあれハ　ときのぞんでりやくあり
りやくあらわすそのときハ　なとかほとけがべつならん
ほとけになつてもこんじやうの　一せのきしをのりはなれ
ねはんにいらざるそのうちハ　まつだいほとけといふでもなし
ときにあつてのほとけなり　ぶつどうじゆぎやうじやうじゆして
五たいをせいしおふせてのち　ねはんのもんにいるならば
まつだいふめつのほとけなり　すでめうわうぼさつだに
みをばせいしかね給ふ　かりのやどりのミなりせハ

」上35ウ

ほとけもかくのごとくなり　ましていわやわれらをや
まつだいはくちのぼんぶなり　されども一ねんほっきして
しん〻〳〵のとくをゑて　まんぐわんじやうじゆするときハ
などぶつりきにあらざらん　ぶつそのことばをかんがミて
じゆぎやうのうへにあきらめハ　ほとけとほんぶのしやべつにハ
これのミのさかひなり　たとへハてんかのせいとうも
しよこうひやうぢやうそのうへに　ぜんあくぜひをあきらむる
ぶつどうじゆぎやうもそのごとく　ひやうぢやうさばきあしけれハ
おふいなるまちがひあり　おふせおかれしそしがたの
ことのはもおふけれど　せぞくにこのりをとりちかい
こゝろへたかへあるゆへに　このことのはをはんべりぬ
〻われといふいたづらむまをもつうちハ
しりとくちとのゆだんならねば

」上36オ

【〇のり　三十六】

〻のりのみちはしるむまにもむちうつて
たつなゆるすなおのかこゝろに
〻のりゑてもこゝろゆるすなかぢおぶね
呼吸（こきう）のかぜのあらんかぎりハ
〇觀音をあきらむることのは　大じ大ひとい　ままさに
かうめうべんじやうくわんぜおん　てらされながらぼんなふの
にち〳〵じぶのかうめうに　じひのまなこをくゝがして
とんよくぐちにめもくらミ　りんゑくわたくのめぐりきて
いんくわのどうりさだまりて　しやうろうひやうしのくるしミに
むりやうのくるしみミにセまり　たすけ給へとこゑをあげ
大じ大ひのくわんぜおん　八まんゆしゆんにうてひゞく
さけびかなじむこゑ〻〳〵ハ　十ほうぜかいしよこくどに
ときに大ひのめうちき

」上36ウ

せつしゆのれんだいさしのべて　あまねくむせつふげんしん
きゝつゝむなしからずして　しゆじやうのうれいになりかわり
たすけ給へるこのゆへに　くわんぜおんとハ申なり
しやくそんいんいのむかしより　八せんたびのごしゆぎやうハ
七せんよくにんにのへ給ふ　万ぜんぎやうのしよくどへも
万ぼう一によにけつじやうして　む二のさとりをおしひらき
われにしんによのぶつしやうハ　こゝろ一つのほかなしと
一ねんほっきひるがへり　じたびやうどうにへだてなく
じひせいぐわんをめぐらさハ　などかほとけになられまじ
これをほとけといふぞかし　すなわちけふの両ようハ
ほうおんせかひのぶもぞかし　大じ大ひの両がんぞ
しよあくまくさと苔のなかハ　みをぶつてきといましめて
大ひのみちをさとりしれ

」上37オ

【〇のり　三十七】

〻子をおもふおやのこゝろのふたゑなき
こんにちさまをくわんおんとしれ
〇三**どくのやまひをけすことのは**　とみとうれいハそいものか
つら〳〵せけんをあんずるに　とみハしよぐわんのさまたげぞ
よくのかぎりをしらぬのか　ひんをぼたいのゑんとして
かならずふくをうらやむな　のちのたからをかせぐべし
ながきゑいぐわのたねをまき　ろうしやうふじやうのミのほどを
おくれさきだつよのならい　しやうじやひつめつそのときに
おもひつらだてくわんずれば　いくせんねんもとことぶさを
さだまるみちとしらずして　三あくくかいのはじめとハ
いわひかさるのあさましや　さのミとしらでまよひいる
のちにぞおもひしられたり　まづしき苔をハいとひつゝ
つらきとぜひをたのしミて

」上37ウ

いとなミすぐるうき苷とハ　まことにこゝぞとくわんねんし
うき苷のなかのありさまを　ふたゝびかへり見ましぞと
おもひきつてもきられぬハ　とんぢんちの三どくなり
かたきとどくにくるめられ　まだもこの苷をいとふかな
むざんなるかなあくどうへ　ひきおとさるゝおんあいの
なごりもつゆのいのちにて　かわきはつべきそのときハ
ともなふものゝあらばこそ　よべどさけべどかいもなく
こゝろばかりハなぎさこぐ　あまのおふねのつなきれて
むじやうのかぜにさそわれて　とをきはとふにこがれゆく
こんじやう一せのいとまごひ　六十六くにゝとりかへて
おしきしやばをハふりすてゝ　いのちいまばのそのときの
つれなきおもひがしでの山　こさでかなわぬしくはつく
六こん五たいのねをたてゝ　三百六十五こつせつ

」上38オ

【○のり　三十八】

ひとつ〳〵のひくいきに　この苷のゑんをはなさるゝ
いふもおろかやそのときを　しでの山とハいふぞかし
ワがみのことゝしらくもの　よそと見るまにみにむくふ
いんぐわのどうりにせめられて　のがれさるかたおかるべし
そのときじふのほんぐわんぞ　まだしきうちにかくごせよ
〳〵かくこせばむじやうぼだいのりハしるな
けふのとせひのおくりかたなし

○念佛あんじんたとゑのことは

さてこくらくのありさまハ　こゝろことばにのべがたし
じゆめうハむりやうながくして　おんがくかゑひのふだんして
たのしむことハかぎりなし　ほんしかくわうあミだぶつ
むりやうこふのそのあいだ　しゆじやうのうれいになりかわり
ふしゆしやうがくのごほんくわん　十あく五きやくのさいにんも

」上38ウ

なむあミだぶつといふことを　いひたにすれハたすかると
あんじんけつじやうするうへハ　へつのしさいなきことハ
そのかミほうねんしやうにんの　一まいぎしやうに見へければ
せつしゆふしやのかうめうハ　いまわがてうにみち〳〵て
いふことのはハなけれども　まよふしゆしやうのありさまハ
ねんぶつのめうやくをも　あくごふのどくにけし
りやくにあづかるひともなし　ミのおろかをハすておいて
ほとけをうらむひとおふし　さてねんぶつといふことハ
あミだによらいにかぎりなし　おもひつきたるみほとけを
ねんずることをねんぶつと　みなすべていふぞかし
十ほう三ぜ一さいぶつ　ことゞ〳〵くなをよんで
おしゆることのならぬゆへ　ほんぐわんミたのめうかうを
ねんぶつとさしていふ　くちでいふよりこゝろにて

」上39オ

【○のり　三十九】

ねんするといふことを　よく〳〵おもひくわんずれハ
ほとけのことをつね〳〵に　よくおもふをねんぶつと
そのねをおして見るときハ　こゝに一つのたとゑあり
ほとけをおもふにしだいあり　くちでいふにもふどうあり
まことに思ふといふことハ　せぞくひとのおや〳〵の
わがこをふびんにおもふほど　おもわざれハしんしつの
ねんぶつにてハあるべからず　わがこをおもふおやのミハ
すたればとてもよねんなく　こゝろのかわるといふことなし
とりちくるいにいたるまで　わがこをおもふありさまを
つら〳〵おもひ見るときハ　くちにとなふるねんぶつハ
みないつわりのひと見せなり　くちにねんぶつこゝろにハ
むりやうのあくごうおもひつゝ　ときにのそんでできふでき
ほとけハすこしもおもわずして　あくごふばかりおもふなり

」上39ウ

おやのこをおもふのハ　くちにあくをいひながら
じひのまなこをいからすも　ふひんさのあまりなり
うがのこゑをたつるより　はゝのこゝろにべつあらハ
いかでひとゝハなるべきそ　はゝのにうみをのミつくして
さんどのぢきをまちかねて　そのあい〳〵にまたあたふ
みづからひとくちどく見して　あしわいしてこにあたふ
ひに一ぜんをそなふるとも　十日わんをあらわねとも
とくしよくなまをそなふとも　ほとけハものをいひもせず
おやのこゝろのはんふんも　せめておもふものならは
ひとくちかミてめじわいして　ほとけにけんするものならば
なとかりやくのあるまじき　まことにねんぶつするひとも
まれにりやくにおふひとも　なきハおろかのみをおいて
りやくなきをあざけりぬ　かゝるところのあくにんまで

」上40オ

【○のり　四十】

もらさずすくひとらんとの　これまたにようらいのほんくわんなり
ぎやうちうさぐわをゑらますに　なむあミだふつのこふをつミ
ごくらくおふじやううたがひなしと　けつしやうしてねがふへし
〳〵こくらくとほとけにとかくちかづくな
しなねばならぬものとしりなば
さとりて見ればらちもなきもの

○天下泰平をいのることのは

つら〳〵てんかたいへいに　こくどあんぜんたることハ
じひにうへこすものハなし　じつげつせいめいたるときハ
五こくしぜんにみのりつゝ　はんみんゆたかになるうちハ
いかで四かいになミたゝん　はんミんつかるゝものならハ
五つのミちもくらくなり　くにのみだれのもとゝなる

」上40ウ

てんかたいへいなることハ　じやうげばんミんおしなべて
大じ大ひをいのるべし　しやくそんいんいのそのむかし
倶毘大わうのおんときに　ゑはらみつのごしゆぎやうハ
ながくてんかたいへいに　ばんミんゆたにおらしめん
大じ大ひのせいぐわんなり　それてんちくのたはたけハ
上中下のしやべつもなく　一じやう二じやうといふとかや
またわがてうのことばにハ　一たん二たんといまハいふ
たとへハ十じやうもつならば　三じやうのところにて
ごねんぐじやうなふいたしつゝ　のこるところの七じやうハ
ふくだとなづけ給ひつゝ　たミのたすけにくだされしハ
ゑはらみつの大くわんなり　くろあぜみづのいるていを
ぬのにてけいづつくりつゝ　まつせにつたへおき給ふ
いまふくだゑといふとかや　そのゝちじやうほん大わうの

」上41オ

【○のり　四十一】

おんことむまれ給ひつゝ　十九のおんときしゆつけして
三十じやうどうしやうがくの　はなのうてなにのり給ふ
しやかむにせそんとあをくなり　おんミにまとわせ給ひたる
やぶれころもハいにしへの　ぐび大わうのおんけいづ
ぜんしやうのおんかたミ　ふくだゑにてハあらざるや
七じやうけさといまなづけ　ほんしによらいのごゆひもつ
わがてうまてつたへける　につほんにんわう五十だい
くわんむていと申せしハ　たミあひれんのふかけれバ
じひをこくどにめぐらして　ながくてんかをたいらかに
なさんとおぼしめさせられ　十じやうのたはけをば
九じやうふくだとなづけつゝ　たミのたすけとなし給ふ
のこるところの一じやうハ　きみにとらせ給ひたる
しるしハいまのへいあんじやう　きやうと九じやうのまちわりハ

」上41ウ

でんぎやう大しのおんすゝめ
あらんかぎりのすへまでも
九じゃうのけさといふものハ
中興權現公様より
てんかわじゆんにふるあめも
ゑたをおしさぬみよとなる
ふくだもいんいのどうりかと
むざんなるかな吞のなかの
けさやころものひかりまし
かゝりつもりしそのすへと
たびやせつたにわたをいれ
によらいのほうもすへとなり
おとろへはてしのりのみち

大し大ひのぶつほうの
つたへまもらんそのために
もしこのときにもはじまるか
ゆミやふくろにおさまりて
つちをうかたずふくかぜも
三五のほうと七じやうの
もつたいなくもおよわるに
ふるくなるのとあたらしき
三五のほうにわりましの
おごりちやうぜしすへの吞ハ
けさもふとんになるならハ
五じやうのみちもすぐならぬ
吞をふりすてししゆつけのミ

」上42オ

【〇のり　四十二】

あかきころものおしからぬ
てんかにふじんのよもあらじ
こくどあんぜんちやうきうを
うすずをいたゝきて
これ見よこれを見よといふ
くにたいらげのどうしなり
さためてもたぬミなりせば
いわのはざまやきのしたハ
おそるゝことのなきものが
あかきころもをいとふゆへ
ぐび大わうのふくだゑの
おきやうもほごとなればこそ
にんわうごゝく大はんにや

ぬぎてすてつるこゝろから
ながくたいへいならんこと
いのらんためのみことのり
七じやう九じやうのけさをかけ
てんかまつせのおきてなり
さいしなければいぐらをも
あめがしたのそのうちハ
しゆつけのすミか也となれば
いふことのはのいわれぬハ
かしやうふつのふんざうゑ
こともつぶさにかきてある
はなしにするひともなし
六はらみつのことのはハ

」上42ウ

（白丁）」上43オ

大じ大ひのひとつにて
かいをかたげてだいかいの
まにほうしゆともてあそび
ばんせいらくをいのるなり
へしりながらめつほうかいなことをして
うをしゆミせんのやまにのぼらん

てんかこくかのたからなり
みづくミほしてとりゑたる
たねかわくハきみが吞の

」上43オ

浮世の詠め

まつ舌の玉章　中

〻百性の名もむさし野の千草のミ
　まつ舌たいらのたねとかきおく
書おくものハまつ舌のかたみとおもひつらき
浮舌のことのはをわが身にひつきやうして
まごやひこらがいけんのためにかきのこし
はんにおこしおきぬ寶暦十四甲申歳中夏
武刕橘樹郡稲毛領平邑山田平七道本

天下泰平　國土安全　謹言

しずの身ハ百性のなもなきものなれば
花を見てたのしむこともなく月をながめて

【○うキ　一】

たのしむこともおもわす舌にのぞみなき
身のいとふへきこともなくたゞまづしきと
せひをこしそうとくおもひしにおもきがうへ
のさ夜ごろもとねたミそねミのおふく
して上たるかたへハざんもふさゝへのすきま
もなくむしつをうくることかぎりもなくうし
とおもふまじとおもひながらもいぢらしく
おもひ菅相丞さまや義経公の御事を
おもひやりつゝ舌のうきことを哥にま
がねいひける
〻ぬれきぬハしずの身でさへうきものを
　なもみなもとのよしつねの身ハ
浮舌ハたゝよくとくにばかりみなひとの

」中01オ

こゝろもてり天下のミちにハくらくやミの
夜よりもたゞしからぬミちハゆくもゆかれ
ず名にハたいらむらといゑどもうきあり
さまやとおもひすぎつるころかきおきける
〻やミよりもすべならぬ舌のミちくらき
　いまハたいらもゆくにゆかれず
よくとくにうつりやすきハおろかなるひと
のこゝろとやくびやうのかミわれひとゝもにしり
ながらはなれおしきハよくしんはなれをし
らずんハあやまちあることちかからんかなら
ず人をうらみべからずわがわざとしるべし
〻おろかなる人のこゝろとやくびやうの
　うつりやすきハよくと徳なり

【○うキ　二】

おろかなる人のときめくひとにしたがひ
よくとくにハうつりやすくつひにハま
ことをうしなひよこしまぶねのときめ
くかぜにしたがひてほをかけてゆくはか
なき人のありさまやとおもひて
〻おろかびと時めくかぜにのりあひの
　よこしまぶねのゆくゑしらなミ
おろか人の大事をしらず上たるかたへもの
いふハかりそめならぬ大事なりおろかなるも
の人のあしきをいわざれハよきものに
なられぬゆへむかしも時平の大臣ゑんぎの
帝へざんそふして菅相丞をるざいさせ
天下無双の義経公をハ武勇のおよばざ

」中02オ

」中01ウ

」中02ウ

るゆへに御まいさらずにざんげんしてしよ
りやうゑしかゞみあり上ばかりよくつくろ
い下をおさむることをしらざるものハかなら
ずのちのおもにとなつてかゑるときにおふ
きなるおとのするものなりそのときハねなし
ぐさのおもにをわきまゑずかゑつてとがな
きかぜをうらむものなりとおもひて
〻かミをよくつくるつぼ木のねなしぐさ
　おも荷にかせのおとをうらむな
ひとのことをざんそうしなミかぜつよくいひ
たつるともわれだに正直なればおそるべ
きこともなし大坂の人ハあらけなしといへども
諸國のふねのなにわづにかゝらぬもなし

【○うキ　三】

人ハいふともさしてくもなしとおもひて
〻人ハうくなにわのことをいふとても
　しよこくのふねのとまらぬもなし
あしきものをも吉といひ上につかゆる
ものゝとりなしせばまことにあしきもよき
になるまことによきもあしゝといへハあしきに
なるあやなきこともあやしくいひなせば
もつれすべなるいともこゞらかるにごる
浮世のありさま悲しき事にやありける
とおもひて
〻あやなせばあやなきいとももつれくる
　おりなしによるよきもあしきも
おろかなるものゝくせに人をうくいひなす

」中03オ

あさましやなつのもみぢのさかりなると
きハ木ゞしたくさのはをハうくもおもひ
なんけれどもやがての秋のあらしにいづれ
のはかちりのこるそのなかにもわけても
みぢハよふらくにのぞんでいろをあらわし
あらしにちるを人にしらるゝくちおしきなつ
のあをもミぢのあきのあらしをしらざるハ
はかなきしだいなりとおもひて
〻人ハうくいふともまゝのあをもミぢ
　いまハしらつゆあきのあらしを
人ハうくいふともよし墅ゝの山ハむかしより
名におふところにて名木おふく春
ことハいまにみやこより花見にゆき

」中04オ

あやなせばあやなきいとももつれくる
　おりなしによるよきもあしきも
おろかなるものゝくせに人をうくいひなす

」中03ウ

けるほどの名におふ山のおくなり人ハ
うくいひけるともよし墅ハ吉墅にて
うき山家なりといふとも又春になれハ
花さき匂ふものなれバしぜんとみや
こびとの耳にも入り目にもつき匂ふ
人のぜんあくもかくならんよしあしも
しぜんとあらわるゝものなりとおもひかく
たとへていひける
〻名にしおわばあしといふともよしハよし
　春だにくれば花ハみよし墅
〻よしあしとうきなハたてどよし墅山
　人ハものゝふ花ハみよし墅
浮世のことはのかくなることハかず〳〵

」中04ウ

おふしきゝしとハかわりそのねをおし
たつねゆきて見ればかくべつなり
御當地にちよとおもひつきて
〳〵名にハうくおとにハきけどきて見れハ
　よこ山町も江戸のみよなか
今このにごる吞の中ハなにぼと君子の
教せりをのべたまふとも人のよく心
にハとゞきかねけるゆへ蒐角にごる世の
なかにハわれひとりきよくすまれぬ
浮世のなかハ見きかぬものぞきよかるべし
見るゆへにそのそミもおこりはらもたち
はからずもむねもちかひかゝらじ山にも
かゝるしよせん吞の中ハくもりかゞみの

【○うキ　五】

見もせんなしとおもひてかくいひける
〳〵にごる吞とくもりかゞミのせんもなし
　見ぬこそきよきむねの玉の井
うきよのなかハ出て見きくゆへにこそ
おもわぬ雨しぐれにもあひかゝるまじき
霧にぬるゝ浮吞の中ハ峯のしらくもの
よそに見てかゝらじと渡せひハすぎ
ゆくぞよかるべしとおもひわが身におもひ
くらべてかくいひける
〳〵かゝらじと渡せひハすぎよむらしぐれ
　うき吞ハよそにミねのしらくも
浮吞の中ハ見ぬきかぬほどいさぎよ
きことハなし見きくゆへにひとのことも

」中05オ

いひたくなりつミもつくりごしやうも
ちがふしらぬほどの極楽ハなし見るきく
ものぞどくなりとおもひて
〳〵何事も見きかぬものぞいさぎよし
　見るハめのどくきくハきのどく
吞の中ハ見きかぬものぞしらなミの沖
につりするいざり火のたれかとがむる
人もなししらぬものぞこゝろよきものハ
なしとおもひていひける
〳〵見きかねば世のよしあしもしらなミの
　おきゆくふねのたれかとがめん
浮吞の中を出て見れハしゆ〳〵むりやう
のうきありさまいろ〳〵の音をだして

【○うキ　六】

なく鳥のなかにも悲しきこゑしてなく
鳥もありうらやましきものハみやま
のかげにあそぶ鶯かずおふき鳥の
うきねをたてしをしらず蒐角浮
世ハいでゝ見ぬものそいさぎよくたのし
ミなることもなしとおもひて
〳〵出て見るな浮吞のなかになく鳥を
　みやまのかげにあそぶうぐひす
出て見るゆへにうきことはのしずくも身
にかゝるおもわさりきのあめあらしに
もあふと鶯になりかわりてもんどう
してはへる
〳〵出て見まじ浮吞のことのそのしづく

」中06オ

」中05ウ

」中06ウ

おもわぬそでにしがの山かぜ
山かげにすむうくひすのうらやま
しくおもひてまたはべる
〻うらやましや浮世の中に吹風を
しらざる山の春のうぐひす
うらやましやのやの字にハこゝろをつ
けて見べしうらやましやあまり
にふかくそのおもひこもりてあるやの
字なり
きくまじきものハ吾のよしあしと
しずのおだまき
〻きかまじきものハ浮世のよしあしと
しずことのはになミかぜのおと

【○うキ　七】

きゝていさぎよきものハ春の鶯と
秋の鹿のこゑ琴びわわごんふへのね
なりとおもひて
〻いさぎよききくべきものハ鶯の
初ねと秋の鹿のこゑなり
見てたのしミなるものハはれわたり
たるそらにすむつきと春の花とハ
いつまで見てもあかずこゝろのこるハ
うつくしき女郎のかんばせなり
〻すむつきと春の花とハいつまでも
こゝろのこれる女郎花かな
まづしうして人のとみをうらやまず
うき吾をうしともおもわずしずが

」中07オ

ふせやのやむれよりさしのぞきくも
りなきおふぞらを月もひとりわれも
ひとりこゝろをしづめつく〴〵と見れば
にごりかへる吾の中にもつきハさやかに
すミたまへハこゝろにさわるくもなしと
おもひて
〻おふそらをしずがのきばのやむれより
つく〴〵見ればつきすミにけり
くもりはてたる吾の中のひとのこゝろ
よくしんゆへにハ人をあしなにいひなし
ねたミそねもおこり無失のなんを受
ることかぎりもなくいぢらしくついにハ宝
暦十年の頃ゆへなきに公訴におよぶ

【○うキ　八】

しずハ人のあくと今日の御うワさを
いわざるのせひぐわんなれハまして上
たるかたへ人のことをハいわず一言も
いひワくるといふことをせずたゞしぜん
天のなせる理ばかりをまつしかるに
くまのごんげんハむしつをはらさせ給ふ
神なれハくもりなきことをあらわし給へと
きせひし奉り曇なきといふことを
題にして一首を献じはへる
〻くもりなきつきハ田ごとにてらせども
うきどりみづをかきにごすゆへ
にごりくもりて理にくらき吾の中
なれば非のいたづらなるくちにておし

」中07ウ

」中08オ

」中08ウ

げなきくちのはにハしぜんの理のおよぶ
べきこともなくよけつはづれつ二年を
すぐる理のくらき吾の中なればいひわけ
も弁舌のついゑなれば奏上に歌を
書はべる
〻むくひなくねたむ矢の根ハよもたゝじ
　しよぶつのちかひもうごならずハ
しよぶつのちかひもうごならざれハ天も
かんなにまし〳〵てやついにハこの歌に
てうたがひはれければくまのへ献じ
たる歌のかゑしうたがひのはれたる
ていをはべりまづの歌のかきたる板を
うらがへしてかきつけはべる

【○うキ　九】

〻くもりなきしんによのつきハついにすみ
　あまねくてらすかけハ田ごとに
無失も漸〳〵とさんじうたがひの
くもゝなしつけはれんとおもふ頃
菊月の七夜の月をまちけるまん
ずる二十三夜のくもなきそらのすミ
わたりてあらわれ給ふをつく〴〵と
ゑひじまことに今こそハうたがひの
くもゝはれたりとおもひさとりて
二十三夜の月へ一首を献じはべる
〻くもりなき天にいのりの七夜まち
　ねがひもみつる夜半の月かな
理にくらくよくとくにばかりてる吾の

」中09オ

」中09ウ

中なれハ理をもつて理をうることなけれハ
あまりに歌をはべり無失のうたがひ
をはらししずの身のはべることのはの
殿上にあそぶハ和歌のとくしぜん天
の道理なり
よわみを見こミうきことのかさなりて
宝暦十年無神月の頃又無失の
ざんさうにおふことしずをなきなにす
るときハ吾の中にさわりなくよくしん
のわがまゝにせんためざんそうししずを
かたつけけんとするなさけをしらぬおろか人
のあつまつていひくるわすことなれば
非をもつはらにして理ハ露ほども

【○うキ　十】

わからずよくとくにかたまりていしに
ものいふもおなじことなりましてミづから
いひわくることをセざれハ又氏神に
祈誓し奉り一首を献して天の
かんなふをまちはべる
〻くもりなきまことの月ハてらせども
　よこぎるくもにへだてらるれバ
此歌をかきてさるかたへおくりける返哥に
〻弥陀たのむ人ハあま夜のほしなれや
　くもはれずともにしへこそゆく
かくいひてきしハ古哥にてもあるや
ミづから一言もいわざるものなれハよくとく
にあらけなきものどもあつまつてどこ

」中10オ

」中10ウ

ともなくいひくるわして人をへだて上をた
ばかるもよくとくのひきかたなりあまつ
さへ家をミだしぐわひけんをそこねくに
をくずすことを忠孝とす主君たる人
の此理をしりたまわばいかでかものをそ
こなふことあらんやこれハ孫ひとらがこゝろ
ゑのために書はべるしかるによこぐもの
はるゝまもなくかきくらがしたる頃ハ宝暦
十三年の初春御慶の玉章をさる
かたへおくりける
　春風にさそわれこゝろばかりをおく
る御慶の玉章
〻玉ほこのすぐなるみちハくらくとも

」中11オ

御慶の玉章浮名のくもにくらがされて
今ハかよひもたゑけれどもなおきものゝ矢筋
もまとにかよふ風のはしをかけてかすミ
がせきをかよふしきしまのことのはつゝしん
でまいらせ奉ると書てさるかたへおくりける
しずのいゑることのはのまことにたつとから
ずして高位にのぼるハわかのとく天も
かんのふまし〳〵てや無失のうたがひも
しぜんの理にてはれてけりさりし宝暦
十年の頃氏神へ献じおきしきせひの歌を
書たる板をうらがへしてよこぎるくもの
はれたるていを書はべる頃ハ弥生十五日也
〻春風によこぎるくもをふきはらい

」中12オ

【○うキ　　十一】

　春ゆく風にさそふむめの香
〻へたつともむめの匂ひハかよふらん
　かすミがせきもかぜハかよわん
〻へだつとも月のひかりハにほふらん
　むめさく山のミねのはるかぜ
〻春風にうきなのくもハはれずとも
　つきのひかりとむめハ匂わん
〻あれはてしのきばの梅も春くれハ
　花ぞむかしのぎよけいなりけり
君ハてる月のごとし玉ぼこのすぐ
なる道なれども浮名のくもにへだて
られてる月もあまねからずたゞ
匂ひもほのかにて春風にさそひて

」中11ウ

【○うキ　　十二】

　まとかにてらす十五夜のつき
にごりたる吞の中をなげきながらもまづし
き糸波をすぐる卯月のせつになりぬれハ
早苗もせひをそろいみづにのりけるていを
あさなごとに見ればひくきところに生じ
たるいねハおくれおくれたるさなへほど苗代
のみづハふかくかゝりけるゆへせひをそろゆる
神明のかごかくのことくなるらめみづと神と
ハおなしこゝろにてありけるやおくれし人に
ハなさけのみづをあつくかけたきものなりと
おもへどもまづしき身のこゝろばかりにかくはべる
〻人おもふ身ハ苗代りみづなれや
　おくれしいねのみづハふかかれ

」中12ウ

にごる吞の中にハせめられいやがうへの貧
苦にせまり難行の渡世をおくりしゆへ
誓ひをたてゝ貧苦の種ハいづくに
あるやとおもひたづねて根をほりつくし
て先祖よりかりおきしいんぐわの借銭まで
返じつくして貧苦の根をたつて子〻孫〻
々までゆたかにくらさせんことをちかつてその
宿業を滅し又先祖より痰症の病
にくるしむもいんぐわの道理なり何卒此業
を滅しつくして病の根を絶しながく
孫〻を無病延命たらしめんことを誓て
身ハ難行をいとわず大じ大ひの誓願
を立ておくるまつ吞の玉章

」中13オ

【○うキ　十三】

〻善根もまかざるたねのはへずんば
　貧と病のたねもはへまじ
〻善根と貧果のたねととりちがへてハ
　いくせをへてかまきなおすべき
〻いることあらば皮肉をそひでちをたらせ
　いゑてのゝちハみなかねとなる
〻元朝のかたミのぬのとわすれずハ
　大つもごりの風ハしのがん
つゝしんで孫らのものども大じ大ひのみちを
まもり悪業のたねのはゑざるやうに
田はたけを耕すべし
しず十九歳のときよりものゝこゝろをおほへて
このかたハ日〻天の御うわさをいわざるの

」中13ウ

誓願なればたとへハ百日雨ふりつゞくともつい
にこまりたることなししかるに寛延の頃大旱魃
におふ世上一同のことなれどもわれ一人のやうに
悲じミうれゑける漸と耕作もあれはてゝ
の後に大雨ふりみづたくさんになりておもひ
しりぬわればかりになき天のあてがいかなじ
むべきことにあらず時いたらねば願ひてもかな
わぬことをくやミけるいまよりしてハ百日の
旱魃たりとももはやこまるまじと覚悟を
さだめける又宝暦の初かた大旱魃にて苗代
の水をうばふこと夜ごとハいくさのごとししずハ
すこしも苗代の水をひかず山にさなへをつ
くれるがごとし五月雨の中葉をすぐれども

」中14オ

【○うキ　十四】

さなへとることもならずうへることもならずし
てなげくこと世上一同なりしかるにしずハか
なしむまじきことをおもひきわめけるゆへ
すこしもうれへずゑんざをしきてさなへを
とり半畳をしきて竹のへらにて田を植
しことためしもまれなるゆへかくいひて後の
はなしのたねとなしける
〻なわしろの水なき山にさなゑとる
　しきしゑんざもかたりつたへに
〻まれになきたゝミのうへにさおとめの
　ぬれざるすそもすへのためしに
　ほりて植しめぐミもふかき御戸代田
　みのりしたねもすへのはなしに

」中14ウ

かくいひてしゆにそむけ田を植ておふくの
人にわらわれて天道のあたへばかりをま
ちみのりしことるい年にもすぎけり
しずハまづしき吉をすぐるゆへに田はたけに
こやしをせず苻中の明神の御戸代田と
しずが田〻ふじやうなるものとてハ露ほども
いれず毎年田をつくれどもついに人に
おとらず毎年余にすぐれてみのりこめを
すりなべに入てよけいの水をひき今日まで
とりつゞきけるまれにハあるへきことなれとも
年來をかくのごとくして人の目のまい
に作りおくものなればしらざるものもなし
願戒をつゝしむゆへに何事も人にかたり

」中15オ

【○うキ　十五】

あらわさねども今ハはや諸願成就し
てあしたをしらぬ露命なれば子孫の
ためにかきあらわしおきはべる
〻みとしろの山田のさなへいつもとる
　かわらぬたねの神のめぐミを
世上一同に悪風におふて苗代ふ作しけれバ
さなへぎきんにて奥のかたハ半分田を
植ふたがずといゑり稲毛ハしつけおそ
きところなれバ笠井領よりなへをかいにき
たるさなゑだちのよき年にハあまりなへを
あつめてあぜにさなへづかをつきける此年
ハ田を植おわつてあぜにみだれさなへ一もと
なくついに田を植ふだがずにしまいぬその

」中15ウ

ときしず田を四百しろ耕しける植おわつて
又四百しろうゑるほどさなへあまりてしず
が邑の田をハみな植ふたぎける寶暦の
初かたにてその年ハ大宝年なりしことを
かたりつたゑんためかくいひける
〻豊年をかねておぼへてためششれ
　さなゑぎきんの秋のミのりを
しずかずならざる貧賤の人にばかり
おふくゑんあつて賢人佞人とみさかふる
もの酒ゑんゆふけうかけことをこのむもの
いかつにして時めく人の氣にいらすすべ
て乱法なるものきにあわず時めく風に
したがひへつらつてにごりにまじわら

」中16オ

【○うキ　十六】

ざるゆへに浮名もたちゆへなき無失のざん
そふにあふこといくたびか公訴におよべとも
堪忍することを才一の願として人の悪を
いわず一言もつひにいひわけをせずなるか
ミのごとく人にいわれてもことばをかへせし
ことなくかいるに水をかくるがごとくなるゆへ
人ハきつてもちのいでぬしぶときものなりと
いゑりねたミゆへにハくわぶんの金銀を損
じ家徳にワかれ他國へワたりながらも
願戒を破らず家徳をうばわれ住処
をはなされんとせしこといくたびかあると
いゑどもついにぐわんかいやぶらずそのうち
にハ方便をゑて又とりつぎけるよつて

」中16ウ

じやう二わききのなりといゑり貧賤の吾に
のそミなき何こゝろなきものにハにくまむれべ
きこともなくしたしミふかけれハ謀叛の
とふどりとも讒奏せられぬ時めいて
吾にのぞミあるものと朱にそまらざるがゆへ
なりされどもしずむほんをくわだて何ごと
をたくミ人のなんぎとなることをなしおき又ハ金
銀をたくわへゑひぐわにはびこり無本をたくミ
なしおきたる悪事もしあらばなを末代に
あくとふの名をとらん堪忍のむねさすり
ついに一言人とことばをあまさず上たるかた
ゑざんそふさゝへをせずかんなんの吾をおく
りけるされどもいたづらに人の口の釵

【○うキ　十七】

にてくびをきられしことハいくたびも二十
年の間生死はめつのくるしミをして
漸諸願成就の時をゑて一天のくも一時
にはれけるしずハ口のはにて人のくびをき
らざるゆへに今万天にいひわけしてかき
あらわして後代にのこし孫彦らがしめ
しとなしはべる謀叛ごとにつけて利
益あることゆへに書あらわしける今度三十三所
観音のことにつけてさるかたより書て
きたりし哥に
〻のりのみちよくもたいらの平七が
　山だといふて人ハうたがふ
　返哥のことのはに

」中17オ

」中17ウ

吾のうきことのはを御つげまことに
はづかしきことにさむろふしず貧
しき糸波をすぐる身なれバ施すべき
財もなく楽しむべき寶も持ずこ
れによつて貧饉を如意宝珠となし
あきらあ甚深たるによらいの本願
式しまのことのはに和解してたやす
く佛性をしらしめ人のこゝろをいさめやわ
らげて幼童愚癡の人の耳につたへ
つきせぬたからを後代につミおかんことを
才一の山としはべる二つにハ今貧饉
のとぼしき財を蒔て一せん万ばいを
後にもうけんとおもふも大よく心なり

【○うキ　十八】

三つにハ夏草のしげれるうちハわづ
かにしておしつけかれはつるその
のちハせめて名のミかたミにとおもふも
又山なり　返歌ハ先さまの題にて
〻のりのみち山だといふハ大あたり
　とても名たかきふじの山ほど
〻のりのミちなにとか浮名たつた山
　つゆの身きへて名のミおく山
〻のりのみちよそにうきなのたゝばたて
　あさまの山のみねのけむりハ
かくいひておくりける又かさねてくわんおん
の利益をあげてこと〴〵く賞美の
文をつゝり歌を書てきたりける序に曰

」中18オ

」中18ウ

謹で案ずるに佛性とハ石中に火の性
あるがごとく衆生必縁によつて能法に
信を得るをさして佛性と名く故に
大信心者則是如來なり如來則是佛
性と説き給ふがごとし其佛性則眞如
實相の信を得るの本元ハ唯三世の佛陀
による佛陀已に多しといふども就中
東海有縁の尊躰ハ獨觀自在大士
にあり三十三身を現じ化して無量世
界に施し衆生を救念し給ふこと一
子を悲しむがごとし其化物を本づけて則
花山帝勅して三十三所靈瑞の勝地を
選び給ふ是を準じて以て諸國に靈

【○うキ　十九】

地を定めて渡りに舩を得るの利益
を爰に足ぬ山田氏二種の孝養を立
て父母を敬まふ何等をか二種とするや
といふに一者世間二者出世間也儒王孔
聖孝經を演佛日已に父母恩重經
を示す是世間の孝なり出世の孝と
いふハ父母をして佛陀に信をとらしめ
て苦輪を離れ乃樂邦に皈せしむる以て
大孝と名づく左れバ山田氏父の遺骨を
荷ひ母を誘引して普く百有余の
靈塲をめくる二種の孝已に圓滿して
後世に止めんとして親く武陽橘樹郡
稲毛領に三十三所の灵屈を定めて詠

」中19オ

」中19ウ

歌を造也是則観音大士ハ師長報恩
を念じ浴冠に本師弥陀を戴き勢
至ハ孝養のために法冠に父母の白骨
を納め給ふ十目の見るところ十手の
指す所彼氏が此孝を行を見る現に
此敬養聞き父母に孝養し師長
に事へ奉るの佛言是茲に中る哉
某浅智短才にして廣智他見
人の笑を顧ず尓云

〽人しれずぼだいをつねにするがなる
　不二の山田と人ハいふべき
〽浮草や山田のさとにすむとても
　まことの法にかなふ人なれ

【○うキ　二十】

〽浮みちの山田をなむとたいらげて
　弘誓のゑんにおふぞうれしき
示時寶暦十四年　春光庵
稲毛廣しといふども古のうきことをつげ
くる人もなし其中に勝れて件の文章
を書きたる希人のことのはなれば三十
三所の軸の序におき後來に止め書寫し
おいめいらが掟としはへる
しずか邑にかりごろものときめいていろを
あらわしける人ありしすがゑんじやのかたへ
しすがはしをわたりて金子をかり
けるにまことにしずがかたよりいひつかわ
しけるとこゝろへしずふべんものなれハ

」中20オ

」中20ウ

ようしやして二年をのべすぎつる極
月のころゑんしやきたりてさいそくしけ
るにしずゆめ〳〵おぼへなきよしをいひけ
ればまつかくのわけにてたれがしの書状
たれ人のつかひにて其方の口上相添
きたりしゆへよぎなく金子つかわしけると
いひけるゆへその人をよびたいめんさせ
ければいづれにも勘定いたすべきよし
をいひてかへりける又其後かの人金主方へ
わたすその金子ハしずかたへわたしたるよし
をいひけるゆへ又しすがかたへさいそくしける
によつてしず又その人にいひけれバその金ハ
早速取返しけれども請取手形を取

」中21オ

【○うキ　二十一】

おかざるゆへいひわけなし此上返をするかね
なきゆへ御公訴申おしらすにてとるべし
とあいそをつくしていひはなしゆめにもしら
ざることのむしつをいひかけてはらを
たゝせ願戒をやぶらせんとす千金にも
かゑがたきしず大願の身なれば金銀
の出入よくとくのことのはハわか身のこと
でたにすてけるにいかでよそごとにかゝらん
や三十三處の大願くわんおんへてきたふものと
かくこしけるゆへそのろんにかゝわらすたゝ
大願じやうしゆをこそいのりける一たび人に
かりたるものゝかへらずといふことハあるまじ
すでに此身でさへかりのやとりなれハ

」中21ウ

空風火水地のもとにかへすましてげん
せんにかりたるものならばかへらずといふ
ことあるまじとおもひかくいひてあき
らめける
〳〵かりのよのかりのやどりときくからハ
かりたるものゝむなしからずハ

」中22オ

（白丁）」中22ウ

栄花の詠め
まつ音の玉章　下

〻音の中をかゞミと見ればわがすかた
　ほとけとも見へおにとも見ゆる
神明のこゝろハかゞミのことしよく万物をう
つしてあとにすこしもとゞめたまわず正直
のとくをそなへてきよくいさぎよきことを
かミのこゝろすよつて神のまへにかゞみをおくと
かや神前にむかつてはいするときハわがすがた
のほかになにもなしまつそのごとく音の中をかゞミ
とたてゝ見ればおそろしくあらわるゝハわがす
がたなりまなこをいからしこゝろのうちにつの
を見せける音のならいはづかしきことのはを

【〇ゑい　一】

かきおき傳る宝暦十四甲申歳中夏
武州橘樹郡稲毛領平邑山田平七道本
　　謹言
天照大神八幡春日三社の託をおよはす
も哥に和解して書ほどこしたくおもひ
けるに〻こゝろだにまことのみちにかなひ
なばいのらずとても神やまもらんといふ
古哥あればいつれのよミ給ふ哥なるや
名哥なれハほかにいふべきことのはもなく
すぐにこの哥をはちいて側に二首をつら
ねて三社の託をかきをこし侍る
天照皇大神宮

〻こゝろだにまことのミちにかなひなば
　いのらずとても神やまもらん
八幡大菩薩
〻つきすめどすまざるみづにかげあらじ
　たゞにごらじとおのがこゝろを
春日大明神
〻ねがわすとしびのいゑにハかげうつる
　おのがこゝろのきよきかゞみに
かくのごとくかきてほとりの児童等に呉ける
宝暦五癸亥年十月西國三十三所をおさめ
美濃の國谷汲寺にめぐりきてふかきしゆ
くせの業ゑんも今こそハめつしすゞしきそら
の日月をかさにかむつてぼんのふのしぐれをし

【〇ゑい　二】

のぎふだらくせかいをみのにきてかりきぬの
一夜をしのぐこの音ハわずか一やのやどり一す
いのゆめなりまよひにくるめられたる今まで
のふじやうゑをぬぎすてゝゑほしかりぎぬを
きてよくあかぼんなふをさりすて大願成就し
て心もはれやかになりけれハかくのことくおさめ
ふだにかきて献じける
〻ぬぎすてゝこよひぞこゝにかりきぬの
　つき日をかさにみのゝくにかな
羽刕湯殿山ハたつとき山なれハとをきくにより
あゆミをはこびこんじきのほとけにもあふこと
のやうにおもひてゆき見れハとりもかよわぬ
しんざんのミにてわがこゝろよりほかにかたじ

けなきものハ苔の中に見へさむらわずれいざんハ
みなかくのごとくならんとうたがひのくもをはら
していひける
〽うたがひのはるゝこゝろが月の山
　外にほとけのあとかたもなし
湯どのざんいきたほとけがるすゆへに
　あわずにかへるあほうぼとけら
みちのくにちぎりおきしちぐさのわかれなごり
おしきハたまつしまさかひの明神何とてなごりに
おくべきことのはもなしおくハしらかわしもつけ
あし堅のさかひなればかくいひ又とふたたび
みちのくのくさをちぎりまくらにすることも
あるまじとおもひ明神へわかれをおしミける

【〇ゑい　三】

〽みちのくのくさのまくらとちぎりけん
　あし堅のとこのつゆをなこりに
宝暦十年の春の頃より天行時疫に
くるしむ人おふくしてそくばくの命を
そんじけるしかるに七才になる女子ぜんごを
ぼうじ九死一生にして二親ふかくなげきけ
るしず観音へきせひをかけ年をかりく
わへて八才となし當卦のあくなんをまつ
りかへ三日のうちにしるしをゑさせ給へと
じゆめうとりのへの願書をさゝげ一首の
哥を献じ名をあらためはへる
〽なミもなくいその杰風おとかゑて
　なをやすかれとながくよぶべし

」下03オ

」下03ウ

もとなをいそといひけるゆへかくいひて名を
かへける人の名のよしあしもあるべきことの
こゝろゑのため書あらわしけるかくなることばハ
かず〳〵なれどもわけてりやくあつき
哥なるゆへ略し侍る
しず幼年のとき七夕の哥をかきはへりて
あるてらの児童どもにくれけることをも
うちわすれすぎし七夕にかのてらにゆき見
れハ児童よりちごに書つたへいつしか古哥
となり今にすたらざるハ和哥のとくなりとお
もひて書しるしはべる
〽天の川くも井のなミにうきはしの
　七ゆふぐれにわたるあきかぜ

【〇ゑい　四】

七夕のあふ夜もまれにちきりのかずもす
くなくはやあかつきのわかれのつゆになりぬ
ればのこりあふくおもひて宝暦十三年
の七夕にいひはべる
〽七夕のたまにあふよのぬれごろも
　かわくもおしきあかつきのつゆ
なが月をまちてこよひばかりの七夕ま
だ初秋のみじか夜のあくるもおしきもの
なりとおもひてはべる
〽ながつきにこよひばかりを七夕の
　あくるもおしきほしあいのそら
立秋になれば秋ハいづくよりきていづく
にとゞまりけるやとおもひて

」下04オ

」下04ウ

〻せミのはのころももいつかすゞむしの
　なきつるゆふべあきハきにけり
〻いつくると目にハ見へねどきこへける
　しかすむ山にあきハきにけり
〻いつくよりくるともしれずはつがりの
　いつかくも井にあきハきにけり
うやつらやと一夜をゆめとさめゆ
けハきよけいのいたらぬところもなしと
すぎにし元朝の頃ひんきうのあま
りにいひはべる
〻ものやうくゆふべハつらきゆめさめて
　けさハかすミのよもにあまねし
〻あら玉の春のかすミもたちにけり

」下05オ

【〇ゑい　五】

　ちさとに匂ふむめのこずへに
〻こそのとをあけてかすミがせきかよふ
　ちさとのかぜも御慶なりけり
弥生の春のよもの山〳〵に花のひら
きしていハげにかすミのごとくさきだつ
てひらきし花ハそろ〳〵とちらめきけるハ
ゆきのふるやうにも見へけるゆへかく侍る
〻しらたへのやよひの春の花がすミ
　ちら〳〵するハゆきかとも見ゆ
花もちりゆきければいつしか山〳〵も一面
にあをくなりける卯月の頃なればかく侍る
〻花染の春のころももきせかへて
　いつしか山ハ青ちやとぞなる

」下05ウ

まつしさにあれはてたるやどにもほたる
火のひかりハいつもかわらずまことにおもひ
のやミをあかしけると身のうきことをおも
いつゝかくいひけり
〻まつしきにあれたるやどのほたる火は
　おもひのやミをてらしぬるかな

」下06オ

（白丁）」下06ウ

仏法と
しゆじやうのために
身をすつる
観音成道今日如來
遍照十方萬劫不退
日本第一熊野本願
増劫開闢三界教主
われぞ世界の
あるじなりけり

【増こう　（一）】

子をおもふおやのこゝろのふたゑなき
今日さまをくわんおんとしれ
かわゆさよついに一日作病せず
今日によらいハくふやくわずや
ぬすミてもくふ苔の中に天とうと
くまのちやうじやハくふやくわずや
いしにかく慈悲せいぐわんのかたまりハ
今日によらいのおんじきとしれ
仏法もかわりはてたる苔のすへに
まだからぬハふじのしらゆき
かわらじな熊野がぐわんのからすばハ
てる日のかげのあらんかぎりハ
はかなさよあきハはなのさかりぞと
落花めつほうするをしらずに
理にくらく苔ハとこやミとなりぬれば
和哥山ならでいふかたもなし

」増01オ

□□□□□利□□とおも
□□世界開闢誓願
とくもるかゝみをつく〳〵とおも□□□
□□れど減劫滅の末世にて乱法□□□□
な□て一天萬下理にくらくとこやミの苔の□□□
げてかぞゑつくされず減劫滅法きわまりてお□
かしこくせわしなくとんよくぐちのこゝろより無名のやまのはつ
かうしてちゞめちゞまることぶきの人壽今ハ十歳□□
生れてあしたにしす醫薬ばかりのちからづなみんめい
やうやくつながれいるむざんなるかな苔の中ハげんこふめつの
末世にて正法しぜんにうしないて仏法すたりまことなく
ぼうけいちりやくすぐならぬこくびやく理非もさかしまの□
そでかためて苔の中ハめつほうかいとなりはてゝ何となる
べき此ときぞこひねがわく正法の妙理仏法さいこうして
國土のくなふをやすめんと諸天へきせひし奉り六波羅
密のしゆぎやうして天下わじゆんに納りて日月せいめい

」増02オ

【増こう　（二）】

あらしめて國土のくなふをやすめんこと大慈大悲のほかなし
と一さいきやうにあきらめて神や仏に命をハ天にも地に
も二つなき身をハしゆじやうのためすて三つの劫をつき上て
増劫世界になさずんば国土あらたになるまじと天のつけ
をかうむりて芥志劫くよふしやうじゆして盤石劫のくよふ
して砂利の劫をつミあげて大願じやうじゆ三劫をつミて
あらたに仏国土けうしやによらいもあらたかに觀音成道正
学の今日によらいとしゆつげんしあまねく十方しよこくど
をてらさせ給ふ今日ハ万劫ふたいのせひぐわんなりむりやうこふ
をちかひなくわが大願のミのりなり天道妙理のしよしゆ
ぎやうハじひを国土にめぐらさん六はらミつのなんきやうぞ
みなこれさいどの本願ぞたれかきりまいふちくれてけふて
らさせる天道ぞ何ほどぐちのしゆじやうでもすこしハ此理を
とくどしてわがぐわんたすけ給へかし天道さまのふちまいぞわれ
たすけ給へかし今日によらいのきりまいぞ国土をたすけ給へ
むりやうこふのおんじきぞさいもつとてハ□□□□□□□

」増01ウ

」増02ウ

さらになきぞかし小石一つののぞミにて命も身をもとりかへ
てしゆじやうさいどの本願なり大慈大悲のにじのもん一切經□
父母とさとりさだめしとんしやのぐわん小石一つに書□□□□□
てじやりのこふとなす七千余くわんの一さいきやう大慈大悲□
見さだめしハわが大ぐわんのまなこなり大千世界のかなめな□□
国王のたましいなり中王のしゆミのしんぼうなり地輪ハ大聖不動
なり国土砂利劫つきかため一さいしゆじやうをたすけんためわが
大ぐわんの一さいきやうむひつもうもくもらさずに七千よくわん
石一つとんと打まにしよしやさせるくわんおんくわうしゆち
ほうべん三ぜんせかひのそのうちにならびるいなきぐわんをた
てぜんだひミもんにためしなきしよきやうしよろくにしるし
なきわが本願のみのりなり増劫世界のかいひやくなりゑい
ゑひとんしや砂利劫ハ年〳〵ゆう〳〵増劫とむりやう
こふのせいぐわんハ今日によらいのてるしたぞ准西國の准
のじと大慈大悲の印文は天よりあとふる日の丸ぞしやう
こハ千ばのからすなりせかひに九百九千九はくろきころも

」増03オ

【増こう　　三】

をちかひきせ国土のしゆごにつけおいて日宮殿（につくうてん）の日の
丸のうちにいちはをこめおいて無りやうこふをてら□
わが本願のいんもんハ一天四海をあわ竹のふしにこめ□□
一ゑんさう大慈大悲の日の丸なり天道めうり吉の中に□
よりほかにあきらかなものがなにとてあるべき□□□□
二つハなきものぞたゞ一すじの天道とものゝ道理を□□
大慈大悲とけつぢやうしてこんごふせんのいたゞぎよりあ□□
せかひを一目に見無りやうこふを見とをセし天に一つ□□
なりわが大ぐわんのまなこなり大慈大悲のくわんぜおんきめ□
今日によらいなり何ほどぐちのしゆじやうでもこれにてと□
なるまじやとんといふりをわきまへようてばひゞくものぞなし
打ておとなきものならはわれ三熊野の神といふあめがした
になをおかじ
　日本第一大慈大悲熊野長者
　吉の中にうつてたいこのおとなくハ
　くまのゝ神とおともひゞ□□

」増03ウ

吉の中に理より□□ぶあきらかな
　てる日のしたに天とうハなし
吉の中に理に二すじハなきぞかし
　たゞ一すじの天とうとしれ
ぐちむちのしゆじやうハ二ゑ三ゑもあれ
　われハひとゑにけふの天とう
吉の中の法にハ七ゑ八ゑもあれ
　ひとゑにてらせ九重のそら
いかづちのひゞきもかよへくもの上
　もてやあそびのしきしまのミち
理につまハくもの上なるひめみやも
　なびかでならぬわ哥の道なり
一切経大じ大ひと尺さだめしハ
　わが大ぐわんのまなこなりけり
吉をたつるじひハ国土のしんぼうなり
　わが大ぐわんかなめなりけり

」増04オ

【増こう　　四】

わがぐわんハこいし一つ一さいきやう
　七千よくわんとんの大ぐわん
なでさすりこにしてつけよくわんぜおん
　四百四病もとんの大ぐわん
とんしやするひとををむなしくなすならば
　われ三熊野の神といわれし
たゞたのめしめじかはらのさしもくさ
　わが大ぐわんのとんしやりきをよ
吉の中にひろきものハくまのゝはら
　三がひむねのうちにおさまる
大きなるものハ熊野の長者なり
　こくうざうをもむねにたておく
うれしさよこれぞことかくことハなし
　熊野長者がとんしやの大ぐわん
しゆミせんにこゑてたかきハこゝろなり
　三こふむりやうのこふもこゝろぞ

」増04ウ

昭和五十三年午年五月
施印者　根本隆介　（根本隆介）
東京都千代田区神田神保町二〇四二

」増刊記

」裏表紙見返

（白丁）」

（せきぐち　しずお　歴史文化学科）

」裏表紙